

第1章 基山町の歴史的風致形成の背景

1. 自然的環境

(1) 位置

本町は佐賀県の東端に位置しており、南西は鳥栖市、北は福岡県筑紫野市、東は福岡県小郡市に接し、佐賀県の東の玄関口となっている。町の東から西までの距離はおよそ6.5kmあり、面積は22.15km²である。

町の20～30km圏内には、佐賀県の県庁所在地である佐賀市、アジアの主要都市の一つに成長した福岡市、筑後地方の中核都市である久留米市が位置している。

JR基山駅と上記各市の主要な駅であるJR佐賀駅、JR博多駅、JR久留米駅とは、15分から30分で結ばれる通勤圏内であり、福岡都市圏に勤める町民も多い。

町の東側には九州自動車道、南側には長崎自動車道が通り、町の南側には鳥栖ジャンクション（以下、鳥栖JCT）も位置するなど、大分自動車道にもアクセスしやすい交通至便な地理的位置にあり、歴史的にみても交通の要衝の地であった。



図 佐賀県の位置

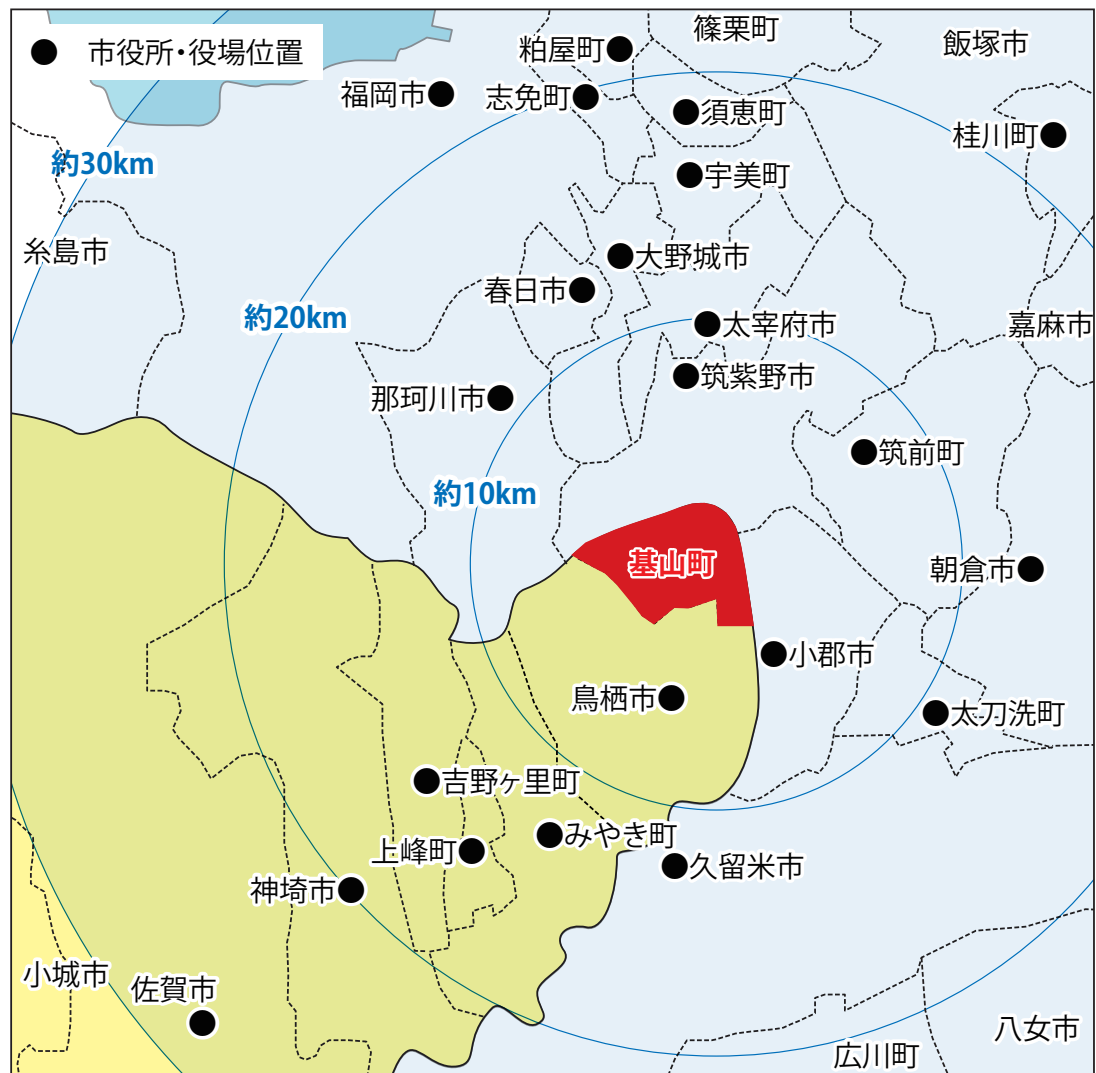


図 本町の位置

(2) 地形・地質・水系

1) 地形

本町は面積22.15km²の3分の2にあたる西部域を山と丘陵地が占める。東部域に平地を有するが、全体的に平地が少ない地形である。町内の山間部は右図に示す筑紫平野からの眺望において平野部の背景となっている。北は二日市地峡帯から福岡平野へとつながる。山地の尾根の間に房松谷・城戸谷・宮浦谷・園部谷が位置し、それぞれの谷筋から平野部に河川が流れている。

町内の山は脊振山系の東端にあたり、北西付近の権現山から契山(408m)、基山(404.5m)等の山が連なっている。特別史跡基肆城跡が位置する基山は町民にとってふるさとのシンボリックな山となっている。



図 広域的な地形

標高60mから下は、1万年前～170万年前にできた河岸段丘で、町内の河岸段丘は高位段丘(海拔45～80m)、中位段丘(海拔20～25m)、低位段丘(海拔15～20m)に分けられ、町域の多くを高位段丘が占めている。

本町は、山間部から丘陵部、平野部まで起伏が豊かなところといえる。

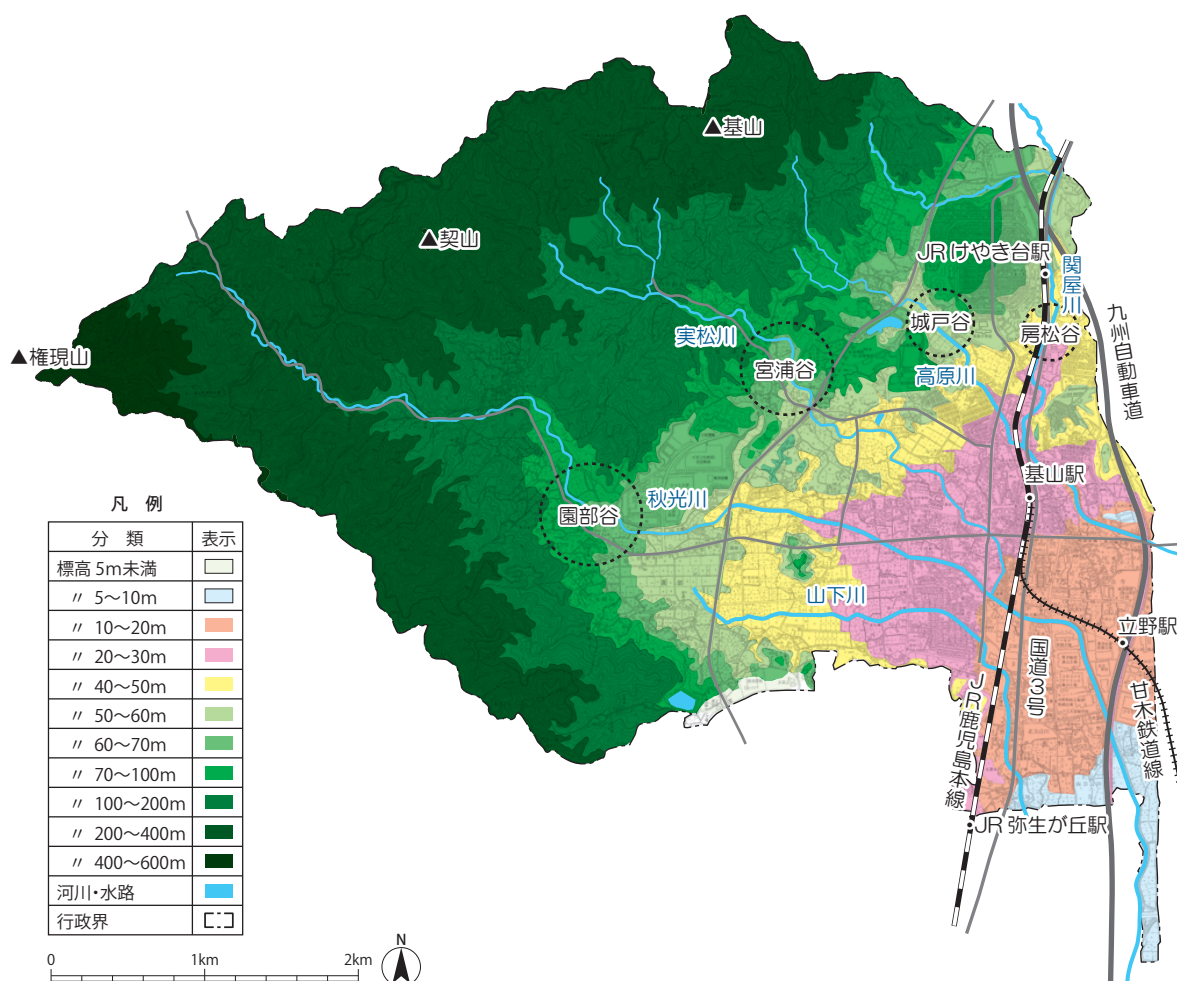


図 地形分類

2) 地質

脊振山地は中生代白亜紀(6千万年前～1億4千万年前)にマグマが固まった花崗岩が隆起し、その中を流れる河川等によって浸食を受けてきたものである。

本町の地質は、大別すると深成岩類(緑色片岩類、花崗閃緑岩類、黒雲母花崗岩類)と未固結堆積物(泥質堆積物、砂質堆積物、砂礫質堆積物)から構成される。

他方、河岸段丘については、高位段丘と中位段丘の上部にはおよそ8万年前の阿蘇火砕流による灰白色の八女粘土層と鳥栖ローム層があるが、低位段丘には見られない。そのことから、高位段丘と中位段丘はおよそ8万年前の阿蘇火砕流以前にできた段丘で、低位段丘はその後の1万年前までの時期にできたものであることがわかる。

町内で農業が営まれている扇状地や東部の平野は、氷河期が終わり温暖な気候になった完新世(沖積世)に堆積した一番新しい地層である。

地形を踏まえて考えると、河川等により削られた山間部の深成岩類の土砂が堆積し、平野部の地質を形成していることがわかる。

なお、基山の南端には「タマタマ石」と呼ばれる巨石がある。伝承として基山南麓にある荒穂神社がかつてここにあった頃の磐座(※神様が宿る岩)とされており、この石も花崗岩礫である。

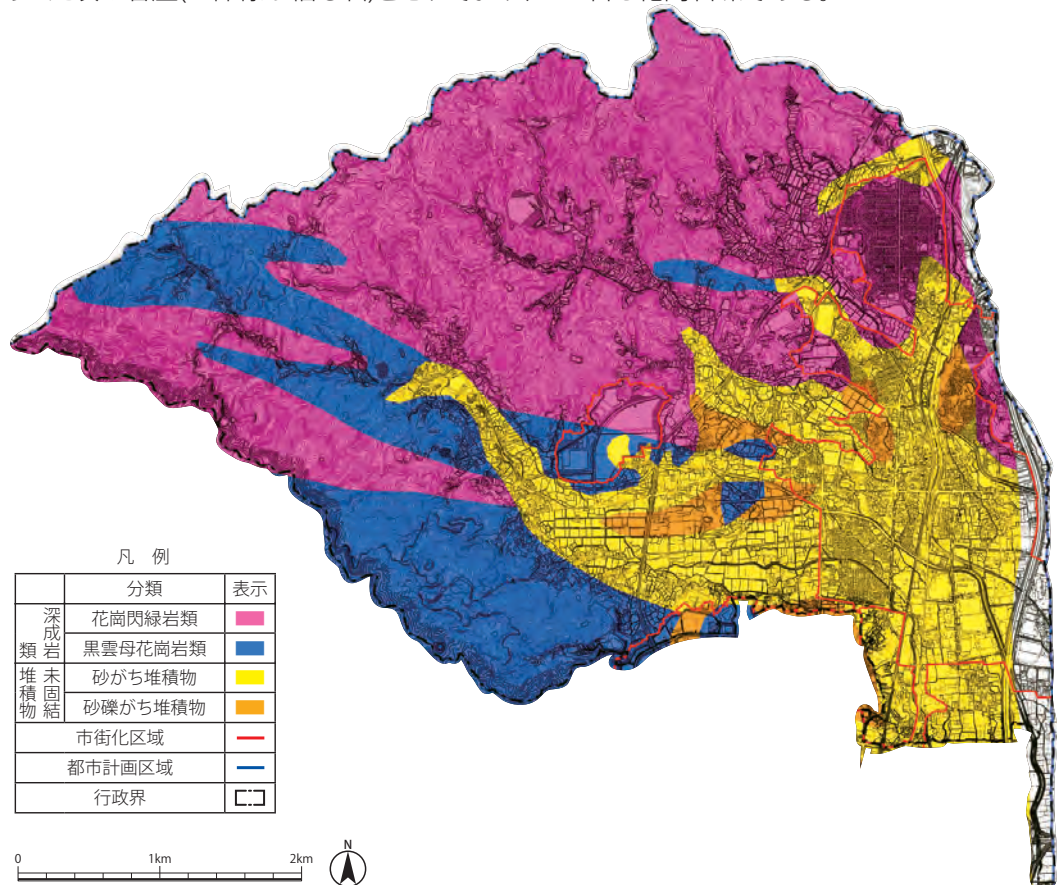


図 表層地質(平成25年度 鳥栖基山都市計画基礎調査)



写真 タマタマ石

3) 水系

主な河川は、関屋川・高原川・^{さねまつ}実松川・秋光川・山下川であり、全で一級河川である。途中で合流しながら鳥栖市で宝満川に入り、久留米市で筑後川に合流したあと有明海へと注いでいる。また、これら河川を流れる水は土砂を谷口から堆積させて扇状地を形成している。

山から流れ出る豊かな水を利用し、木山口町での酒造業が営まれている。

町内にため池は少なく、自然流水による農業用水に恵まれた地であることを物語っている。

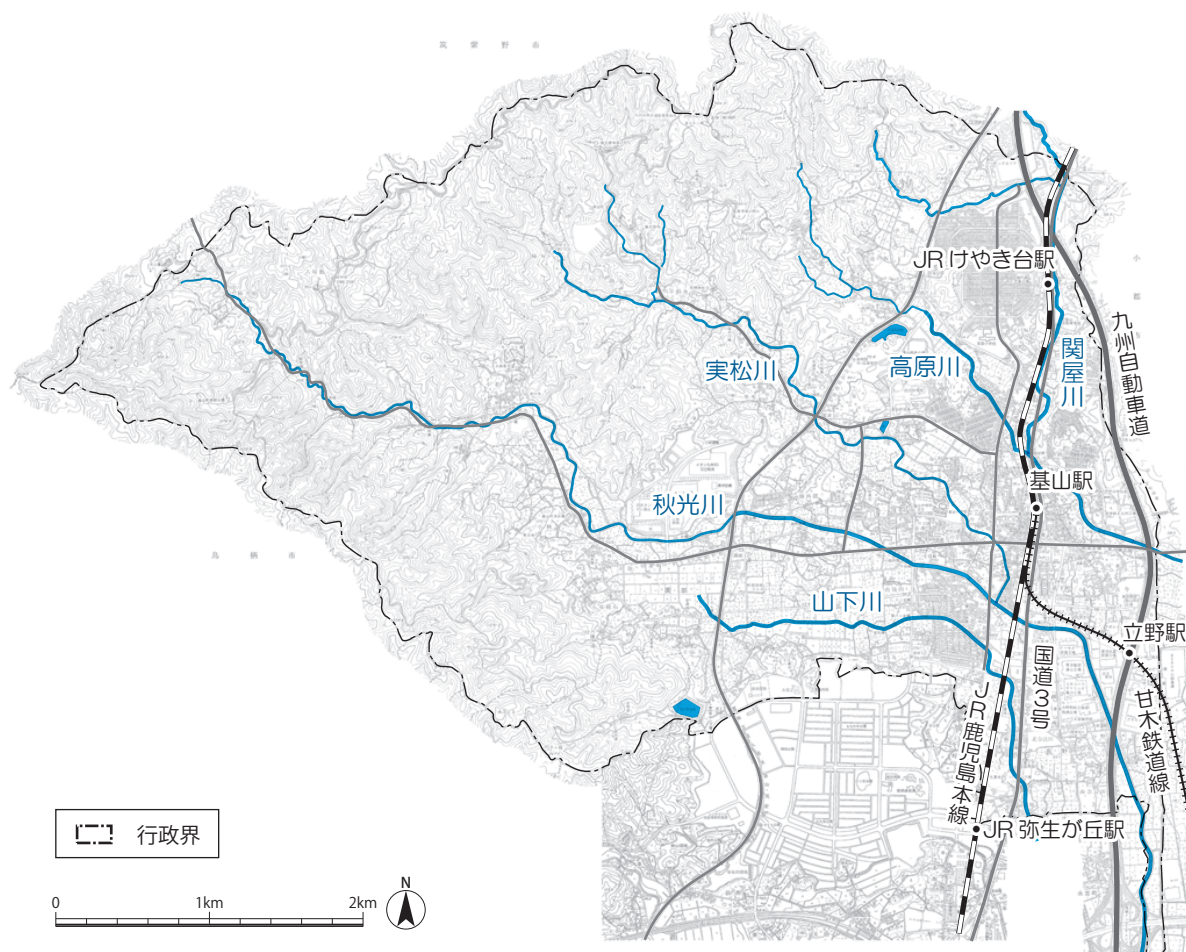


図 水系



写真 小川の風景【秋光川】



写真 用水と小屋
【城戸川(筒川) ※高原川上流の通称】

(3) 気象

本町は、過去10年間のデータによると月別の気温差が20度前後ある。月の平均最高気温は8月の37度、平均最低気温は1月の-2.9度で、年平均気温（日平均）は16.3度、年間降水量は2022.45mmである。内陸型気候区に入る。

冬は強い北西季節風が脊振山系を越えて吹き下し、二日市地峡帯を吹き抜けるため、佐賀市、福岡市、筑後地方より気温が低く、降水量も多く雨や雪が降る日数が多い。

月別の降水量は、近隣の地域同様に梅雨時期の6月と7月が突出している。梅雨明け後の夏は、近年の豪雨に代表されるように脊振山系からの吹きおろしの風が三郡山系の山にぶつかることで、雷雲発生頻度が高まり、激しい雷雨となっている。特に基山の山頂付近で雷雲が発達したときには激しい雷雨となっている。

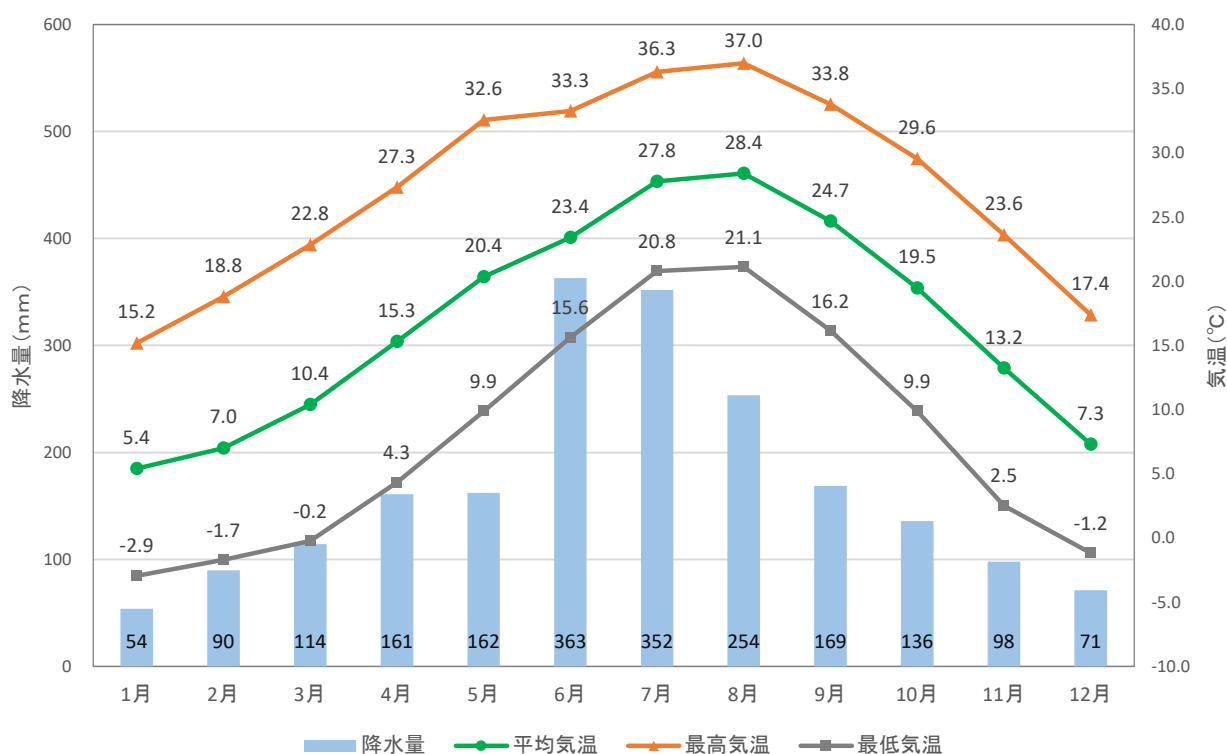


図 気温と降水量(資料:気象庁データ 久留米における平成20年(2008)～29年(2017))の平均値)

表 年平均気温と年間降水量(資料:気象庁データ 久留米における平成20年(2008)～29年(2017))の平均値)

年平均気温（日平均）	16.3度
年間降水量	2022.45mm

2. 社会的環境

(1) 町村の合併の経緯

明治22年(1889)には、小倉・長野・園部・宮浦の4ヶ村が合併して基山村が成立し、昭和14年(1939)の町制施行により基山町となり、現在に至っている。

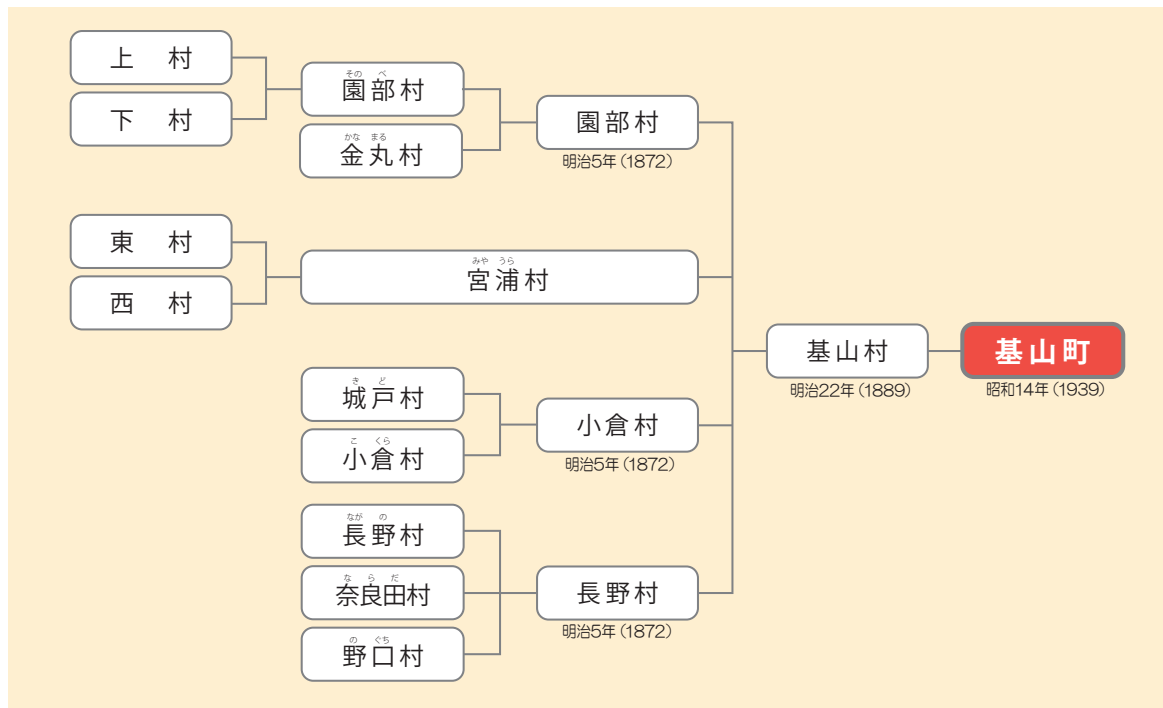


図 近代以降における基山町の変遷

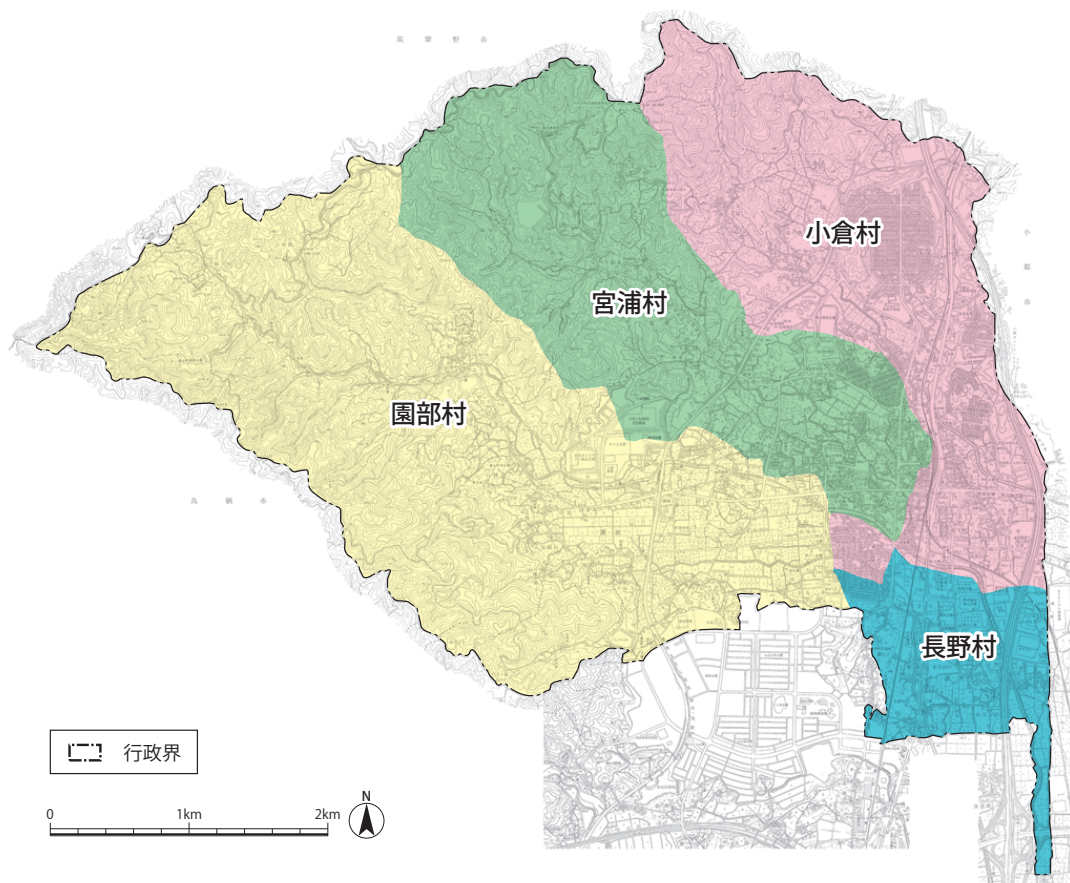


図 明治5年(1872)～明治22年(1889)の村域

(2) 土地利用

本町の土地利用は、都市的土地利用(住宅地9.3%、道路・交通施設用地8.1%、工業地4.7%等)に対して、自然的土地利用(山林46.1%、農地19.7%、河川等)が町域全体の約7割を占めている。

都市的な土地利用は本町東側の平地部に広がり、特に交通の利便性の良いエリアに工業用地がある。自然的土地利用は、旧集落を中心に山間部や丘陵が広がる本町西側の大半を占めている。

本町は、昭和48年(1973)、自然環境と都市環境とが調和し、安全で活力に満ちた秩序あるまちの発展を促すため、町域全体を都市計画区域に指定している。都市計画による区域区分制度を導入し、町域の約8割が市街化調整区域となっている。更に、保安林、県立自然公園、農業振興地域等の指定を行い、適正な土地利用の誘導を図っている。

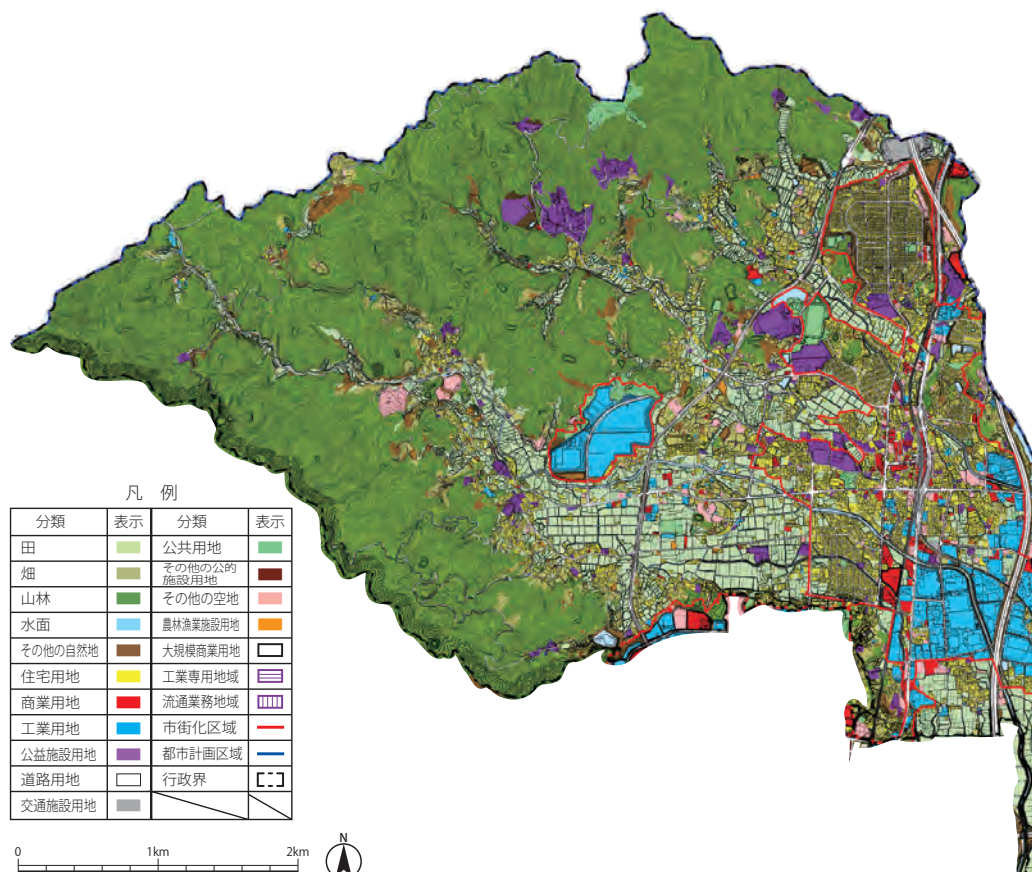


図 土地利用現況(平成25年度 鳥栖基山都市計画基礎調査)

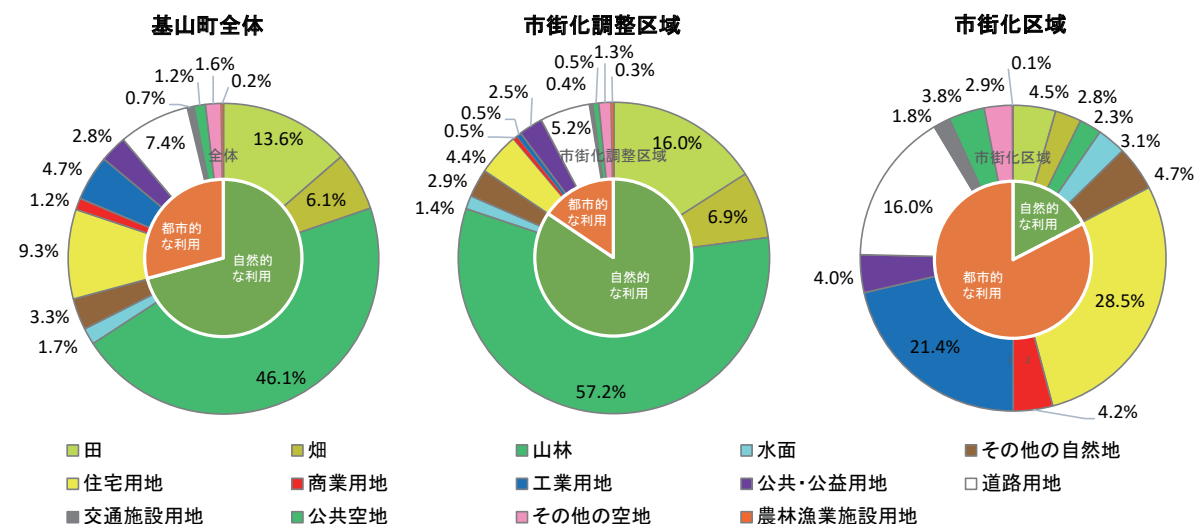


図 土地利用の構成(平成25年度 鳥栖基山都市計画基礎調査)

(3) 人口動態

本町の人口は、昭和50年(1975)以降、平成12年(2000)まで増加傾向が続いている。平成初期には、交通利便の良い北東端部で大規模な住宅開発が行われ、平成2年(1990)～平成12年(2000)の10年間では人口で約4,700人、世帯数で1800戸が増加している。

平成12年(2000)以降は、世帯数が伸びる一方、人口は緩やかな減少に転じている。一世帯当たりの人員数は、平成7年(1995)の3.6人に対して、平成27年(2015)には2.8人となっており、減少が続いている。世代別にみると、15歳未満の年少人口が平成7年(1995)以降減少する一方、65歳以上の老年人口が増加して、65歳以上の老年人口が増加しており、地域同様に少子高齢化が進行している。

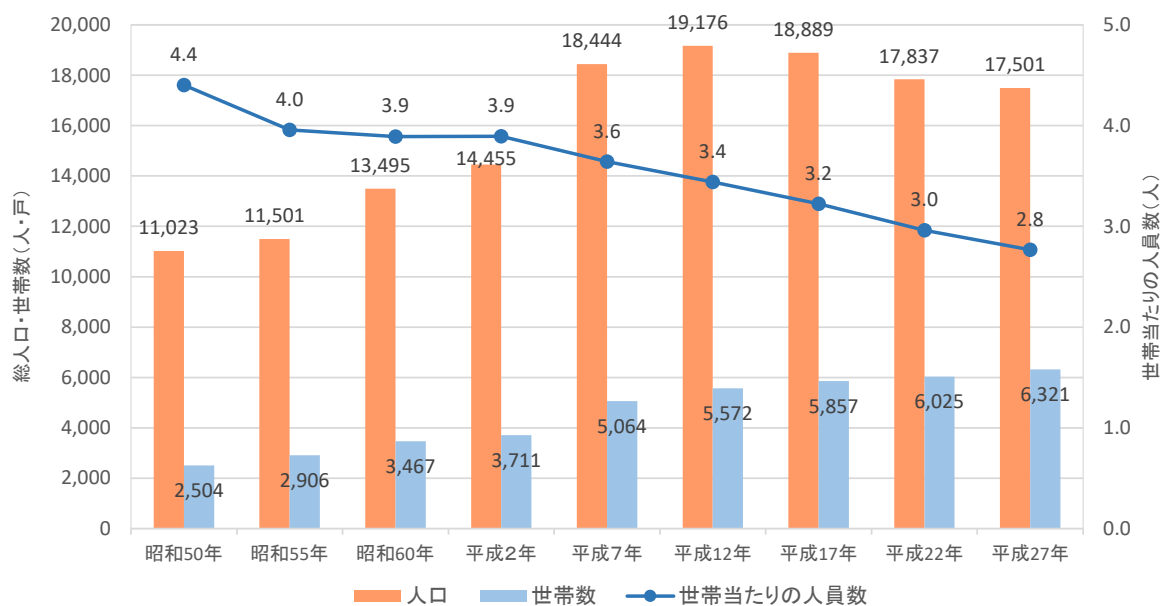


図 人口及び世帯数推移(資料：国勢調査)

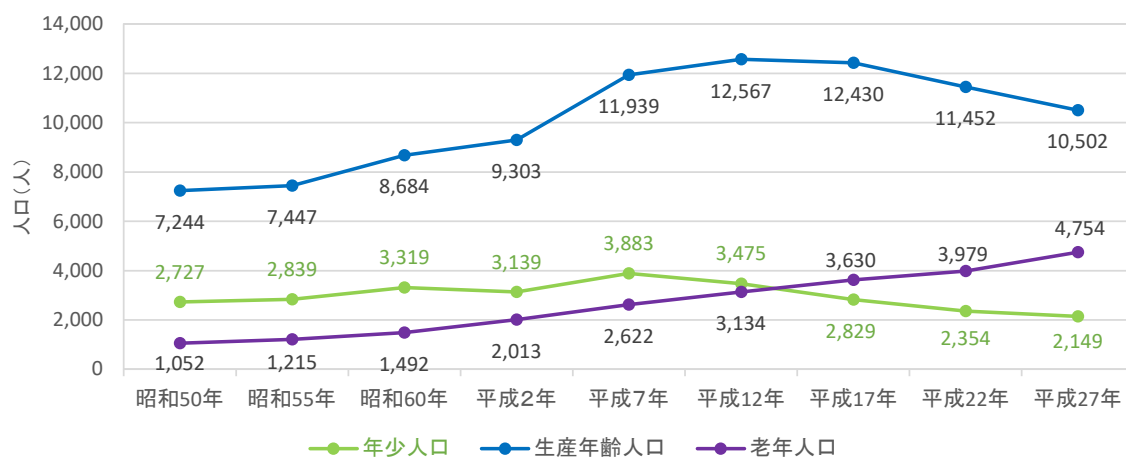


図 3世代別人口の推移(資料：国勢調査)※

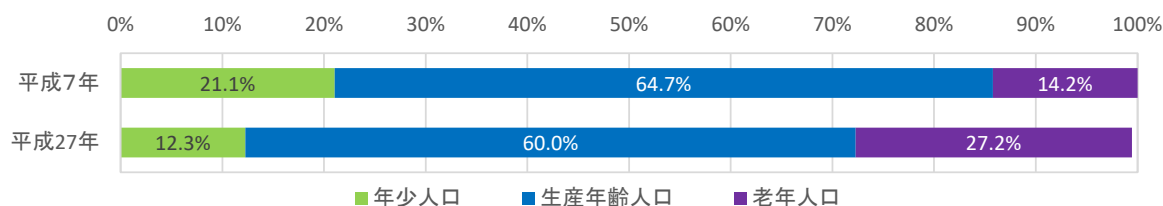


図 3世代別年齢構成の割合(資料：国勢調査)※

※年少人口：0～14歳、生産年齢人口：15～64歳、老年人口：65歳～ ※平成27年の年齢不詳人口は含まない。

(4) 交通機関

本町の交通に関する主な変遷を整理すると下表のようになる。

表 本町の交通網に関する変遷

昭和47年(1972)	「鳥栖筑紫野有料道路」開通
昭和48年(1973)	鳥栖IC―鳥栖JCT―南関ICが開通
昭和50年(1975)	古賀IC―鳥栖JCT開通
昭和58年(1978)	基山駅前広場整備
昭和60年(1985)	佐賀大和IC―鳥栖IC開通
昭和61年(1986)	甘木鉄道(沿線自治体、住民、麒麟麦酒(株)等が出資する第三セクター方式の「甘木鉄道(株)」が設立し、運行スタート
昭和62年(1987)	鳥栖JCTで大分自動車道を接続
平成 2年(1990)	JRけやき台駅―新設開業
平成13年(2001)	鳥栖JCTの「サガクロス橋」開通
平成19年(2007)	鳥栖筑紫野有料道路が料金徴収期間満了に伴い無料開放(県道17号久留米基山筑紫野線と共用)
平成20年(2008)	国道3号基山町内4車線化完了

本町の交通体系の現状は、町域東部の平野部を、国道3号、県道17号久留米基山筑紫野線(旧鳥栖筑紫野有料道路)、九州自動車道、JR鹿児島本線の各路線が南北に走り福岡方面と佐賀、熊本方面を繋いでいる。また、町域南部を大分・長崎自動車道が東西をつないでいる。九州の東西南北に移動しやすい交通の要衝に本町が位置していることが窺える。

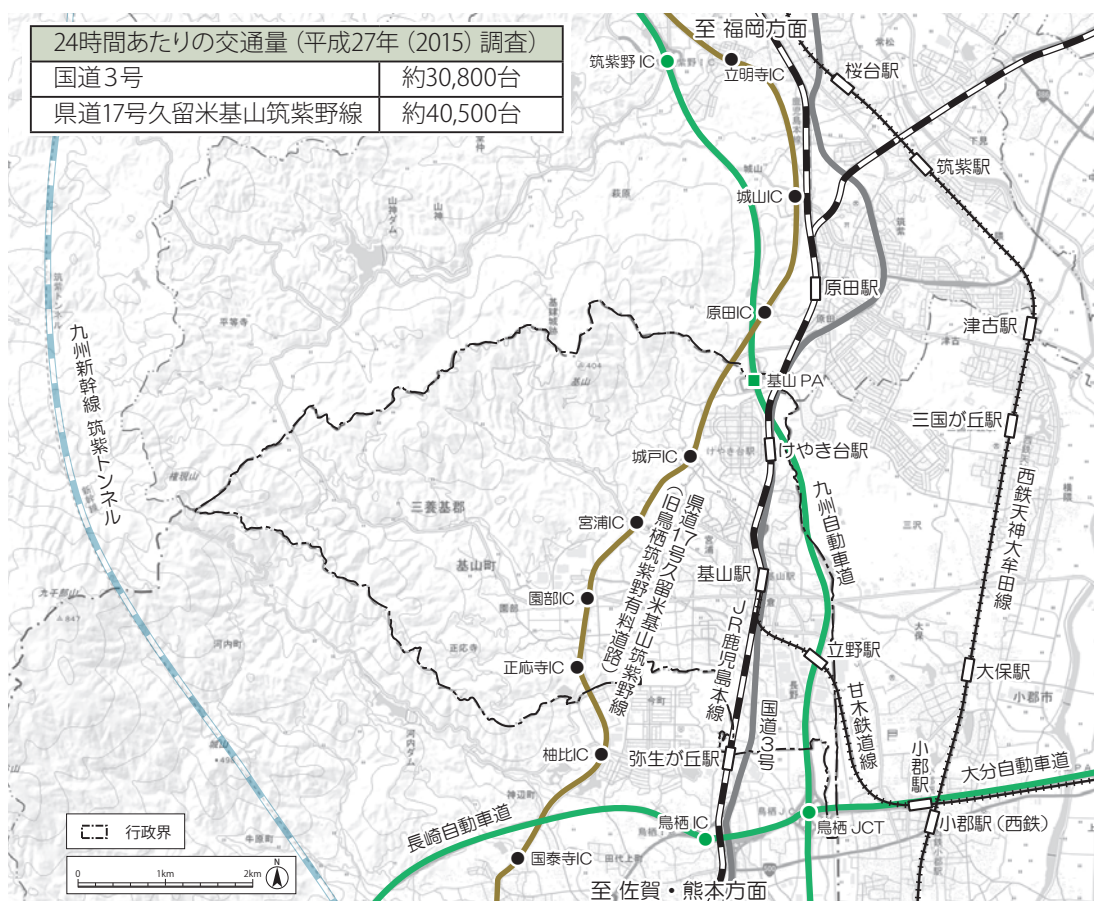


図 交通体系

本町の公共交通は、JR鹿児島本線、甘木鉄道、町営の循環バスが挙げられる。JR基山駅の1日平均乗客数は増加傾向にあるものの4,000人未滿で推移している。JRけやき台駅では1,300人を超えており、これは、駅の東側に位置する福岡県小郡市における近年の団地開発に起因していると考えられる。利用者の中には登山客も見られる。バス路線は、町内循環バスの6路線が運行され、町民の町内移動を目的としたバスではあるが、近年では基肄城跡への訪問のために、このバスを利用する人々も見られる。

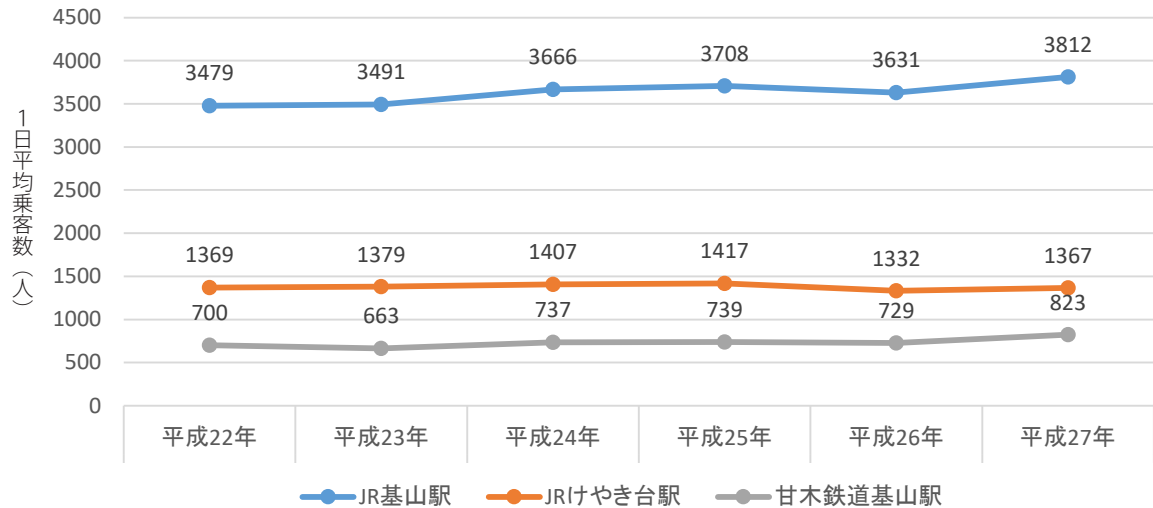


図 主要鉄道駅における1日平均乗客数（資料：佐賀県統計年鑑）



図 町内巡回バスの路線図

(5) 産業

1) 産業構成

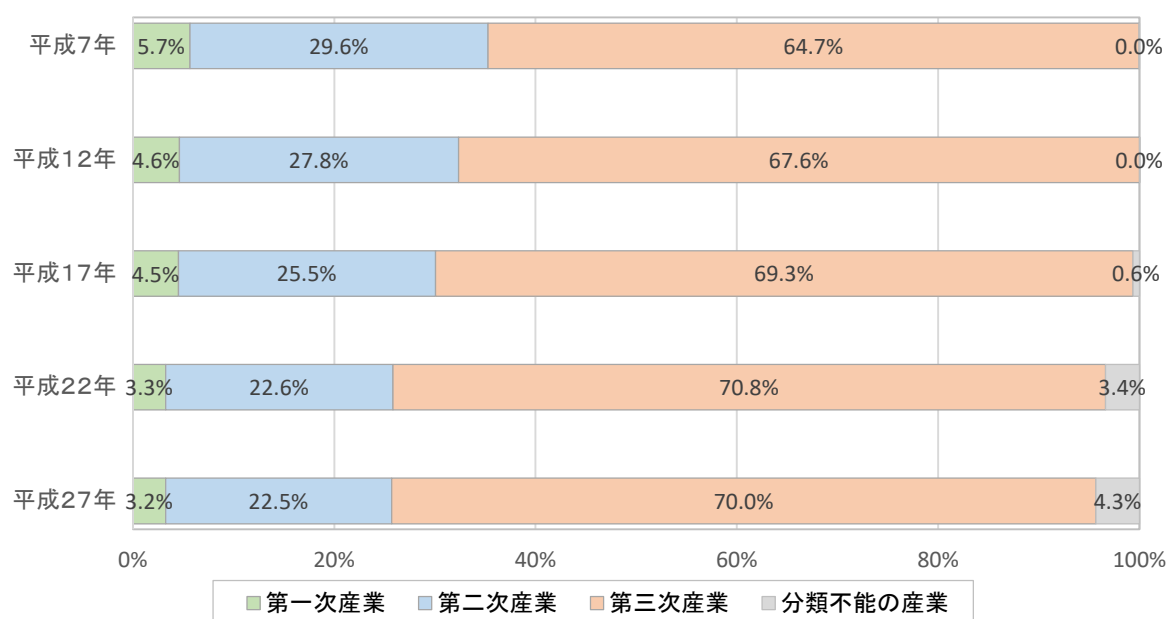
ア) 就業人口

本町の就業者人口は、戦前まで農業のまちとして第一次産業が大半を占めていたが、戦後の高度経済成長を経て現在に至るまで、第一次産業の減少が続いている。

平成7年(1995)には、既に第一次産業の就業人口が1割を切るまで減少、一方、第二次産業は3割程度、第三次産業は6割を超えるまで増加している。

平成27年(2015)には、平成7年(1995)と比べて第一次産業とともに第二次産業も減少し、第三次産業が7割を占めるまで増加している。

本町では、第一次産業とともに第二次産業の就業人口が減少する一方、第三次産業の増加が進展する傾向が続いている。



第一次産業：農業、林業、漁業

第二次産業：製造業、建設業、電気・ガス業、鉱業

第三次産業：小売業、サービス業

図 産業別就業人口の推移(資料：国勢調査)

イ) 農業

本町では、総農家数、専業農家数、兼業農家数ともに平成22年(2010)まで年々減少してきた。しかし、平成27年(2015)には、総農家数と専業農家数でやや増加し、持ち直しの傾向も見られる。

近年では、米、麦、大豆の他、柿などの果物、アスパラガス等の施設園芸、お茶の栽培が盛んになっている。

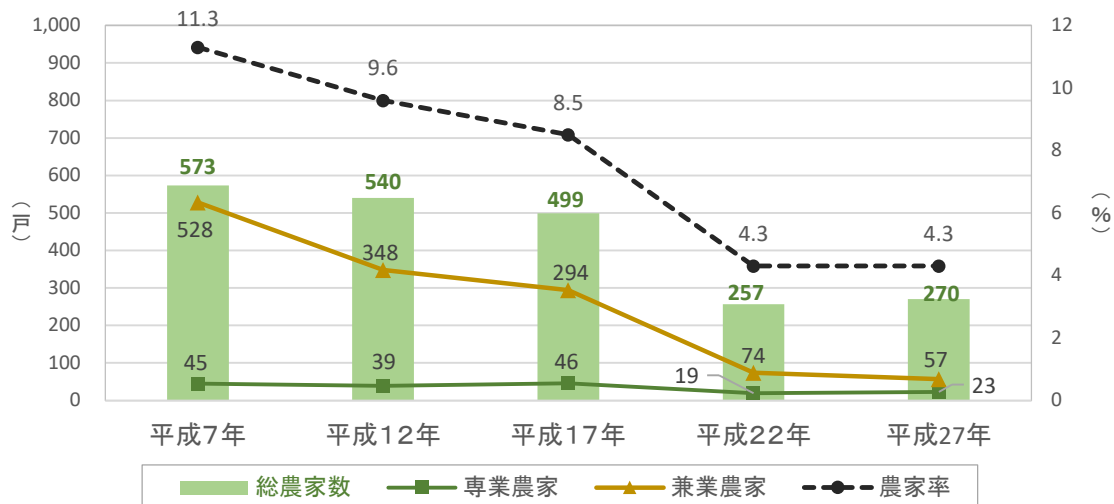


図 農家数と農家率の推移 (資料: 農林業センサス)

ウ) 商業

小売業については、商店数は概ね横ばいで推移している。従業者数と商品販売額は浮き沈みがあるが、平成16年(2004)から平成19年(2007)は増加し、また、平成24年(2012)から平成26年(2014)をみても増加している。

町内において、小売店が集積する場所として、JR基山駅前が挙げられる。駅前には、4つの商店街(基山モール商店街協同組合、けやき通り商店会、木山口商店会、9区ふれあい商店会)が組織されている。すべて中心市街地内にあり、平成28年(2016)10月現在、空き店舗を含め128店舗が存在する。

これら商店街の空き店舗率は、長期的な動向ではけやき通り商店会を除き、上昇の傾向が窺える。

なお、商店街のうち長崎街道の間宿としての範囲を含むものが木山口商店会である。

国道3号沿いには、開店50年を超える飲食店があり、往来する人々を今も迎えている。近年では、外国からの観光客も立ち寄るなど、さらに賑わいをみせている。

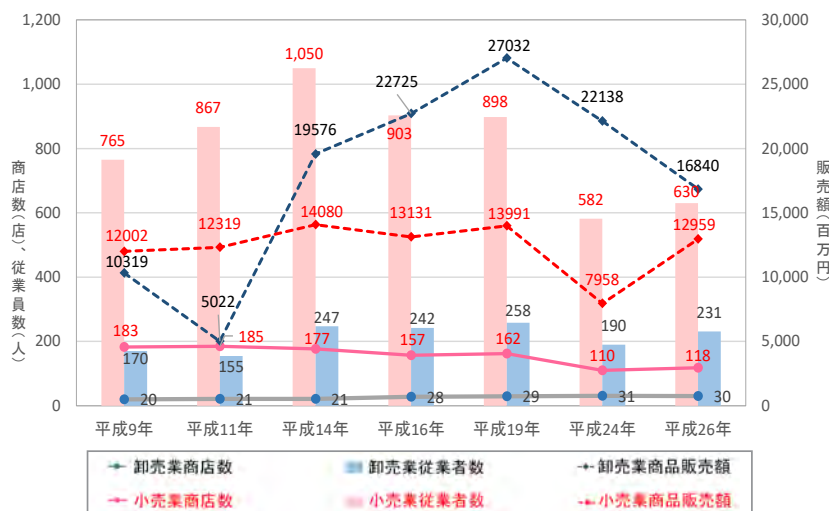


図 商店数、商業従業者数、商品販売額の推移 (資料: 商業統計調査、経済センサス活動調査)

※商業統計調査は、平成日本標準産業分類の第12回改定及び調査設計の大幅変更が行われたことに伴い、平成19年調査と平成26年調査の数値は接続していない。(経済産業省HP/統計/商業統計を参照)

エ) 工業

本町には、昭和40年代からはじまった企業誘致により、飲料、金属製品、食料品等の製造業が立地している。

製造業の製造出荷額等は、平成24年（2012）までは横ばいで推移していたが、近年は増加傾向にある。事業所数は全体として緩やかな減少傾向、従業者数は横ばい傾向がうかがえる。

創業100年を超える売薬につながる薬製造業や、酒造業、食品製造業の中には創業50年を超える業種もあるなど、地の利と知恵を生かした営みが今も地道に続いている。

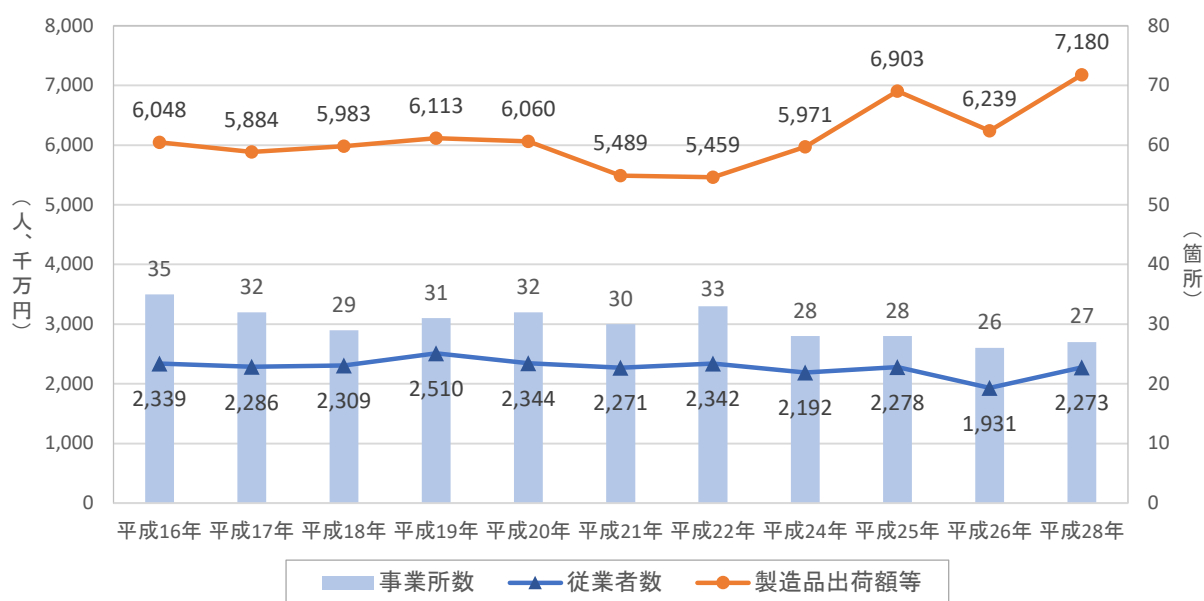


図 事業所数、従業者数、製造出荷額等の推移（資料：工業統計調査） ※平成23年の調査は行われていない

2) 観光

本町は、特別史跡基肆城跡、大興善寺、荒穂神社、宝満神社等の歴史的な建造物や、脊振北山県立自然公園等の自然環境に恵まれており、近代からこれらは観光資源として活用され、多くの人々が訪れている。

これら以外の主な観光地・レジャー施設としては基^き山の草スキー、大興善寺のつつじ園(5月上旬が見頃)、基山ラジウム温泉等がある。

近年、大興善寺は紅葉(11月中旬～下旬)の名所としても知られ、春のつつじと合わせて、秋の名所としても来訪者が増えている。

基山ラジウム温泉は、昭和25年(1950)に発見され、「基山商工会報」や新聞各紙でも報じられている。商工会は、観光の目玉として「秋は招く観光ハイキングの好季節 おかえりは基山ラジウム温泉へ」と宣伝し話題となった。

現在、観光客は、佐賀県内をはじめ福岡市等の日帰り圏域からの来訪が多いものの、その数は昭和60年(1985)頃までは年間60万人以上を数えたが、昭和62年(1987)を境に半数近くまで落ち込み、その後、さらに減少していき、近年は年間15万人前後で推移している。

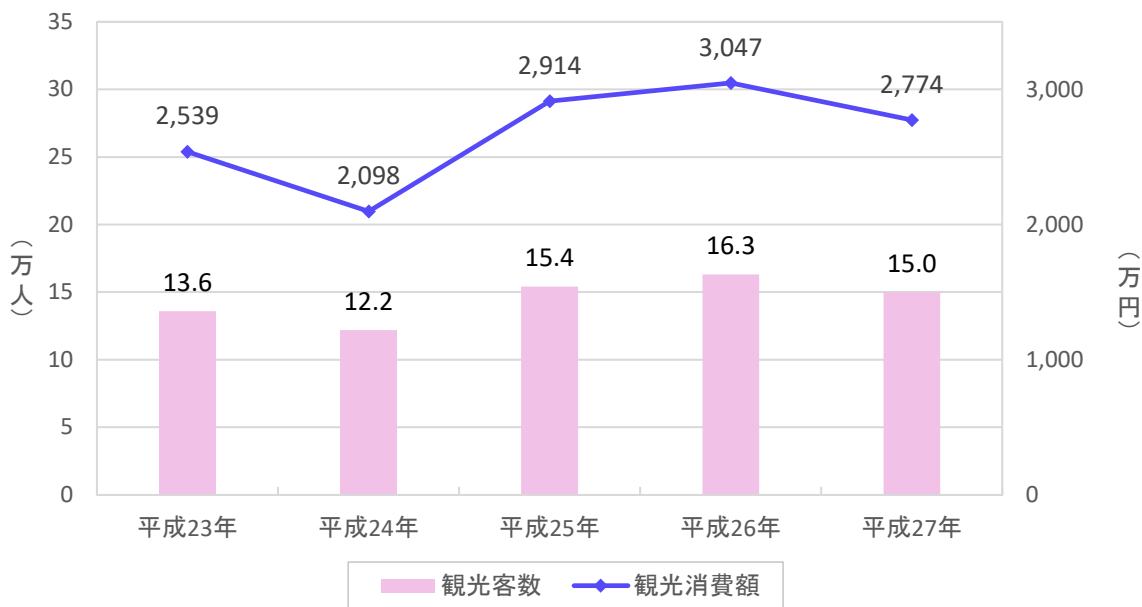
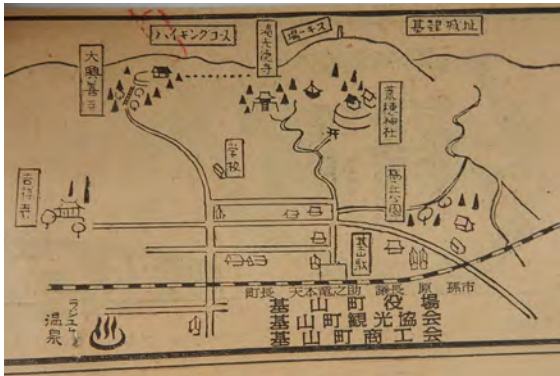


図 近年の観光客数と観光消費額の推移(資料:佐賀県観光客動態調査)

表 主な観光施設の年間客数

おもな観光施設の年間客数	
草スキー	約2,800人(平成27(2015)～29年(2017) 平均値)
大興善寺	約79,000人(平成27(2015)～29年(2017) 平均値)



資料 ハイキングコースとラジウム温泉を案内する地図(昭和28年(1953)基山商工会報)

3. 歴史的環境

(1) 歴史

1) 原始

ア) 旧石器時代・縄文時代

旧石器時代は、主に石器を使用した狩猟生活を行っていたとされる。町内では、かつてJR基山駅の西側にあった丘陵上に位置した千塔山遺跡、その東側に立地する城ノ上遺跡から、約1万5千年前の石器が発見されており、この頃には人が暮らしていたことがわかる。

縄文時代では、土器が発明され、食料の煮炊きや保存が進歩した。千塔山遺跡からは、町内では最も古い時期にあたる縄文時代はじめ頃の押型文土器の破片も発見されている。この土器のほかにも、千塔山遺跡からは、石鏃をはじめとする打製石器、石斧などの磨製石器なども出土している。縄文時代の終わり頃の集落跡は、若基小学校付近にあった白坂遺跡、園部インター付近にある立花遺跡で見つかっている。

ただ、他の時代の遺跡に比べると、町内における旧石器時代や縄文時代の遺跡は、今のところ、多くは発見されていない状況である。

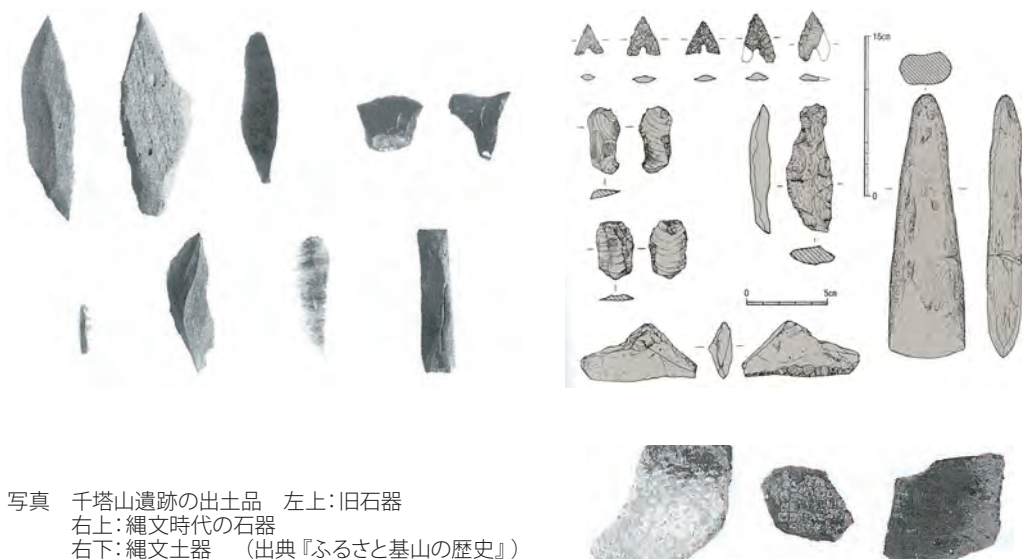


写真 千塔山遺跡の出土品 左上：旧石器
右上：縄文時代の石器
右下：縄文土器 （出典『ふるさと基山の歴史』）

イ) 弥生時代

弥生時代になると、農耕の開始や鉄製品の普及などが行われ、人々がより大きな生産力を持った時代と考えられている。町内における弥生時代の代表的な遺跡としては、千塔山遺跡、小郡市との境界付近に立地する野入遺跡や古寺遺跡、鳥栖市との境界付近にある久保田遺跡などを挙げることができ、町域でも平野部での発見が集中する。

千塔山遺跡からは、弥生時代中期から後期頃の集落を濠(溝)で囲み防御性を高めた環濠集落が見つかり、吉野ヶ里遺跡発見前では佐賀県内でも希少な存在として多くの注目を集めた。さらに、鋤の先端にはめこんだU字形の「青銅製鋤先」も発見され、希少性が高いことなどから県指定の重要文化財(考古資料)に指定されている。近年、喜界島(鹿児島県大島郡喜界町)で青銅製鋤先が発見されるまでは、日本発見例の南限であった。遺構としては他に、箱式石棺や石蓋土壌墓などの墓も見つかっている。

野入・古寺遺跡からは、竪穴住居跡や掘立柱建物などとともに、多くの土器や石器なども発見され、当時、大規模な集落を形成していたと考えられている。また、野入遺跡から、祭祀用とされる土器を赤く塗った丹塗磨研土器が多く見つかっている。

久保田遺跡では、弥生時代中期の終わり頃の、人を埋葬した甕棺が発見されている。このうちの一つの甕棺は、鉄戈が副葬されており、この地域の有力者が所有していたものと考えられている。



写真 千塔山遺跡環濠集落
(出典『ふるさと基山の歴史』)



写真 野入遺跡出土丹塗磨研土器
(出典『ふるさと基山の歴史』)

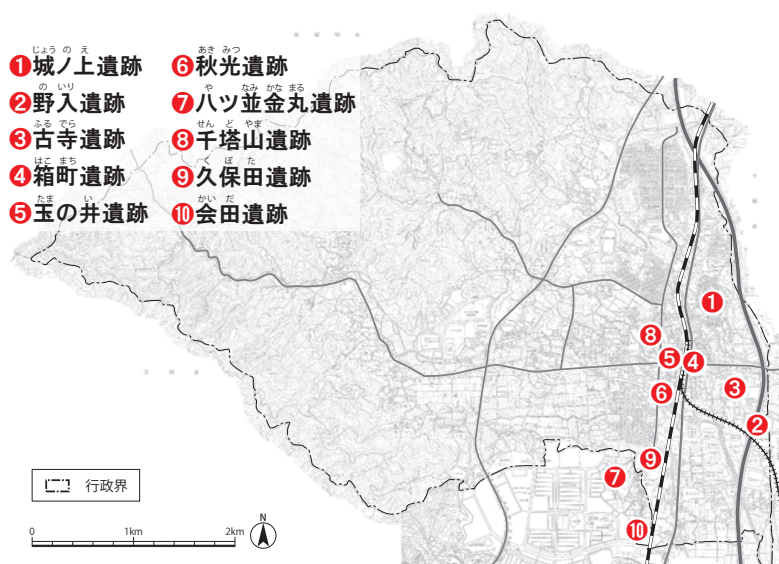


図 主な弥生時代の遺跡分布 (出典『ふるさと基山の歴史』 一部加工)

ウ) 古墳と集落

古墳造営を時代の指標とする古墳時代に入ると、3世紀末から4世紀にかけて近畿地方を中心におさめていた大和王権の勢力拡大を示す前方後円墳が全国各地に造られていく。本町に近い鳥栖市北部には、いくつかの前方後円墳はあるが、町内においては見つかっておらず、現在のところ大和王権と結びつくような豪族の存在を伺うことは難しい。

古墳時代前期のものとして、町域中央部に位置する中隈山遺跡や御仮殿古墳群では、方形周溝墓、

木棺墓、土槨墓などが発見され、古墳時代中期頃には、町域東部の伊勢山遺跡で、竪穴式住居が見ついている。ここでは県内最古と考えられている竈や祭礼に使われたミニチュアの土器も出土し、町域では数少ない当該期の集落遺跡である。古墳時代後期になると、横穴式石室を持つ円墳(群集墳)が山麓や平野にある丘陵などに多く築かれるようになる。町内では、町域北部から東部の丘陵域にある白坂から城戸、向平原・宮浦谷、園部谷、三ヶ敷・八並・上野の山麓や、中隈山・御仮殿などに、群集墳が築造され多くの人々が暮らしていたことが分かる。

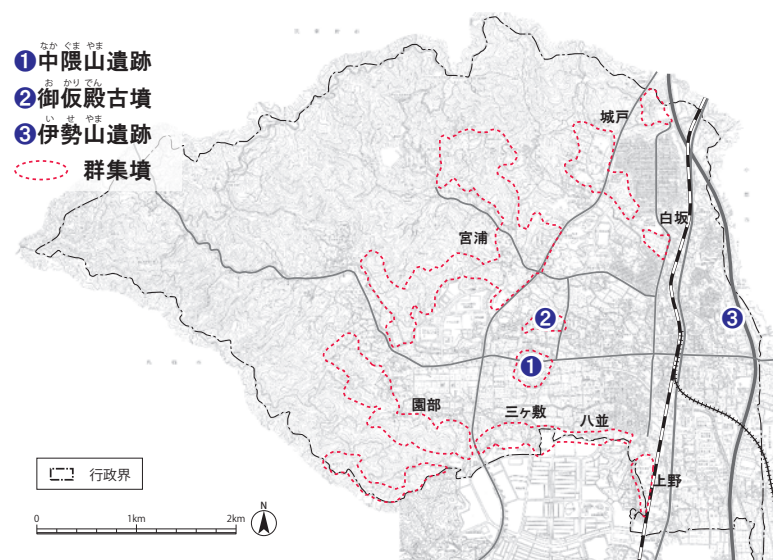


図 主な古墳時代の遺跡分布

2) 古代

ア) 国造制と基肄城・小水城等の築造

6世紀中頃、大和王権は、地方支配強化を図るため、各地域の有力豪族が地方官として治める国造制を導入する。町内における当時の国造は、「国造本紀」によると、松津(杵肄)国造ではないかと考えられている。

7世紀後半に入ると、本町に所在する遺跡と関係性が深い国際的状況が生じた。このことは、日本古代の正史『日本書紀』に見ることができ、天智2年(663)に、百済救済のために出兵した白村江の戦いに敗れた倭(日本)は、唐・新羅軍の侵攻に備え、大宰府を中心とした北部九州防衛の拠点として、天智4年(665)に大野城とともに、基肄城を築いたことが記されている。基肄城・大野城は、山城築造に詳しい百済高官の指揮のもとに朝鮮半島の山城をモデルとして築かれた、我が国で最初の本格的な朝鮮式山城であり、大宰府の南と北を守る軍事拠点としての役割を担っていた。この正史に残る基肄城が、本町の基山に所在する特別史跡基肄城跡である。

同時に、関連する防衛施設として、町内には関屋土塁やとうれぎ土塁が築かれており、これらは大宰府の西に築かれた水城の小形のものという意味で「小水城」とも呼ばれている。関屋土塁は城ノ上丘陵と千塔山丘陵の間に、とうれぎ土塁は千塔山丘陵と向平原丘陵(あるいは玉虫丘陵)の間に築くことで、容易に敵が侵入することを防ぐ目的があったと考えられている。また、基肄城内にある建造物へ供給したと考えられている瓦窯が、基山の南東麓にこうらぎ瓦窯跡として推定されている。瓦窯跡前面には灰原(燃えかすを捨てた場所)が包蔵されていると考えられ、周辺の河川に瓦類が散乱している。



図 大宰府と周辺の防衛網(出典『ふるさと基山の歴史』 一部加工)



写真 基肄城跡と周辺の防衛施設の位置



図 関屋土塁・とうれぎ土塁(想定)(出典『ふるさと基山の歴史』)

3) 中世

ア) 荘園

平安時代後期から徐々に天皇・貴族の社会から武家を中心とする社会へと変化し、日本古代の国家的土地所有が崩壊するとともに、私的土地所有へと移行し、前代である平安時代中期から貴族や大きな寺社の私有地である荘園が全国的に見られるようになる。基肄郡では、小倉、神辺、奈良田、園部、荒穂の5つの荘園と、基肄北郷、基肄南郷に「金丸名」「小松名」の2つの公領が確認できる。(正応5年(1292)8月16日付け河上社造営用途支配惣田数注文(河上神社文書))。

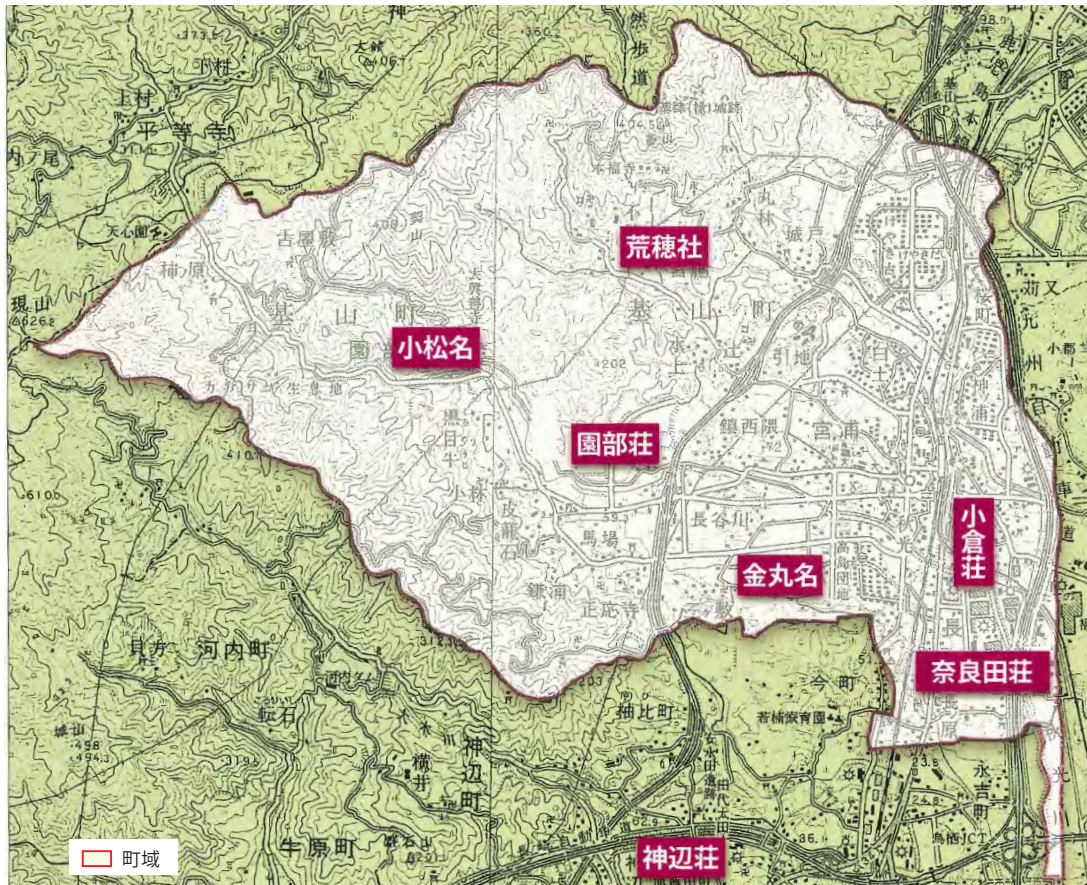


図 基肄地方の荘園関係地名 (出典『ふるさと基山の歴史』 一部加工)

イ) 南北朝時代

建武2年(1335)、足利尊氏が京都を制圧し、光明天皇を擁立、これに対して大和の吉野に逃れた後醍醐天皇が、吉野朝廷を開いたことにより、京都(北朝)と吉野(南朝)の両方に分かれて争う南北朝内乱がはじまり、56年間続くことになる。

町内にある自然石彫像板碑には、「正平10年(1355)」銘があり、南朝方で使用された年号であることから、当時、本町周辺が南朝方の勢力下にあったことがうかがえる。

南北朝時代の最終段階になると、太宰府を制圧した北朝側の今川了俊は、南朝軍が太宰府防衛のための砦としていた「城山(木山)」を攻め取り、本陣とした。この「きやま」こそ、基山のことであり、古代山城・基肄城跡が中世山城である「木山城」として再利用されたことがわかる。



写真 自然石彫像(童子)板碑
(出典『ふるさと基山の歴史』)

ウ) 中世山城

本町が位置するところは、中世においても肥前・筑前・筑後三か国の境界に面し、交通の要衝として重視された場所である。この地では、少弐氏・鎮西探題の渋川氏・大内氏・大友氏などが争っていた。町内には、その際に使用されていたと考えられている中世山城が計6ヶ所確認できる。

木山城跡は、基山山頂に位置し、そのすぐ北側には、通称「いものがんぎ」といわれる堀切が現存している。宮浦城跡は、木山城跡の南西側、町域の北東部に位置し、筑紫氏が使用していたことや大友氏の支配拠点とも考えられていることから、戦国時代の基肄郡における中心的役割を担っていた可能性もあるとされる。このほか、柚比城塞、鈴町城塞、字「笹原」城塞推定地、柿原少弐軍陣所(所在地不明)、立花「城の辻」城塞などがある。

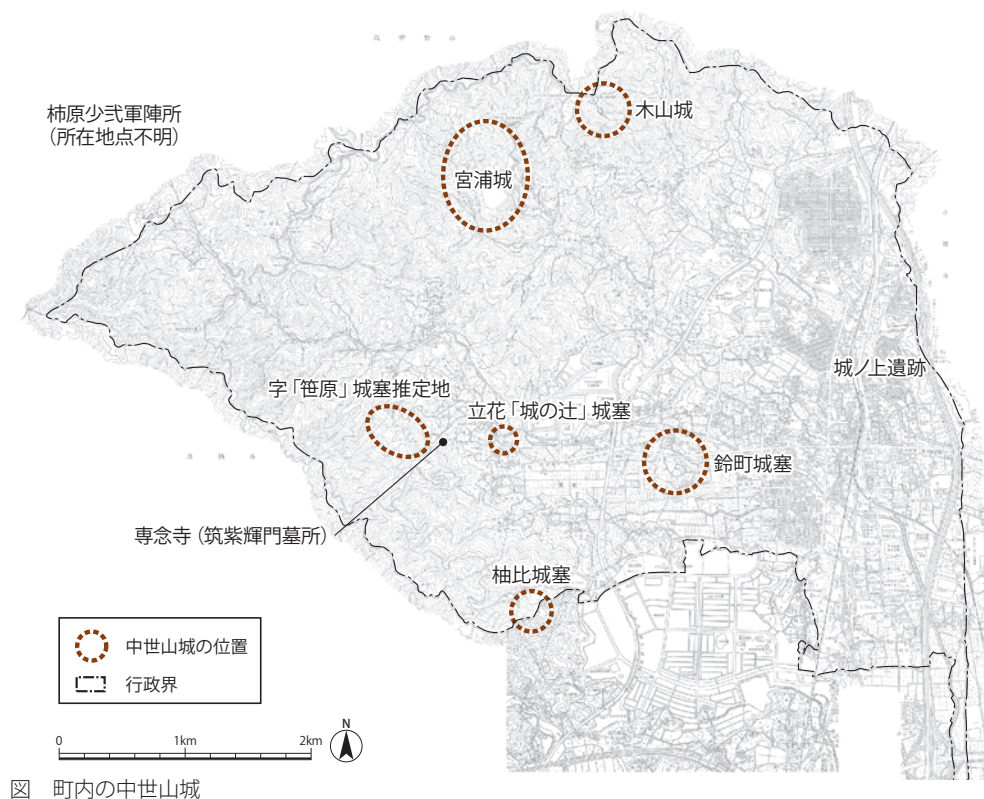


図 町内の中世山城

エ) 筑紫氏

筑紫氏は、応永年間(1394～1427)に、筑前国御笠郡(筑紫野市・太宰府市域)・夜須郡(筑前町域)から肥前国三根郡(三養基郡域)まで、さらには佐賀郡や小城郡まで領地を広げたとされ、その居城とした勝尾城は、本町の南に隣接する鳥栖市にある。

文明11年(1479)11月19日付け少弐政資安堵状案(「筑紫文書」)の書状に町内の地名を確認できることから、その勢力がここまで及んでいたことがわかる。また、先に挙げた中世山城である宮浦城も筑紫氏が使用したこととされる。さらには、永禄11年(1568)には、宮浦城南方約2km、町域西部に所在する小林山専念寺には、筑紫輝門の位牌と墓塔が安置されたという記録が残り、筑紫惟門の墓所も存在したとされる。現在も本堂脇の泉水に接して両者の墓塔と伝わる多重石塔が祀られている。



写真 専念寺に伝わる筑紫氏の墓碑(多重石塔)

4) 近世

ア) 対馬藩田代領

江戸時代、本町は佐賀藩ではなく対馬藩田代領として、宗氏の治政下にあった。

その経緯は、戦国時代末期、豊臣秀吉による九州統一後の天正15年(1587)、本町を含む通称「^き基^{やぶ}肆^ふ養父」
と呼ばれる基肆郡・^{やぶぐん}養父郡東半部(基山町・鳥栖市東半部の地域)が小早川隆景の所領となった。一方、文
永4年(1595)に、対馬島主宗義智は、豊臣秀吉による第一次朝鮮出兵の功が認められ、薩摩国出水郡の内、
1万石が豊臣秀吉より与えられる。

その後、慶長3年(1598)の第二次朝鮮出兵(以下、「慶長の役」とする)の際に、基肆養父を治めていた小
早川秀秋の勇み足が、豊臣秀吉の逆鱗に触れ、小早川領は没収、一時秀吉の蔵入地になる。一方、慶長の
役で薩摩国島津氏は軍功をあげ、その恩賞として出水郡1万石を含む4万石が与えられた。この出水郡の代
替地として、秀吉が小早川氏から没収した基肆郡・養父郡の内1万37石を対馬島主宗氏に与えることとした。
これをもって慶長4年(1599)より、対馬島主宗氏の対馬藩田代領となり、以後明治初頭までは田代領には宗
氏が代官をおく時代が続くこととなる。

この頃、江戸幕府による藩地掌握を目的とし領地絵図が描かれる。対馬藩田代領も正保期と元禄期の二
様絵図が対馬藩宗家文書として伝えられ、その精緻さから元禄期に描かれた絵図は、現代の地形図に写す
ことができるものとして知られている。この『対馬藩田代領絵図』(以下、『元禄絵図』とする)は、通称『元
禄絵図』として知られ、現在の基山町にも当時の道が多く残されている。



資料 『元禄絵図』(元禄年間(1688~1704)頃) 長崎県立対馬歴史民俗資料館蔵 一部加工

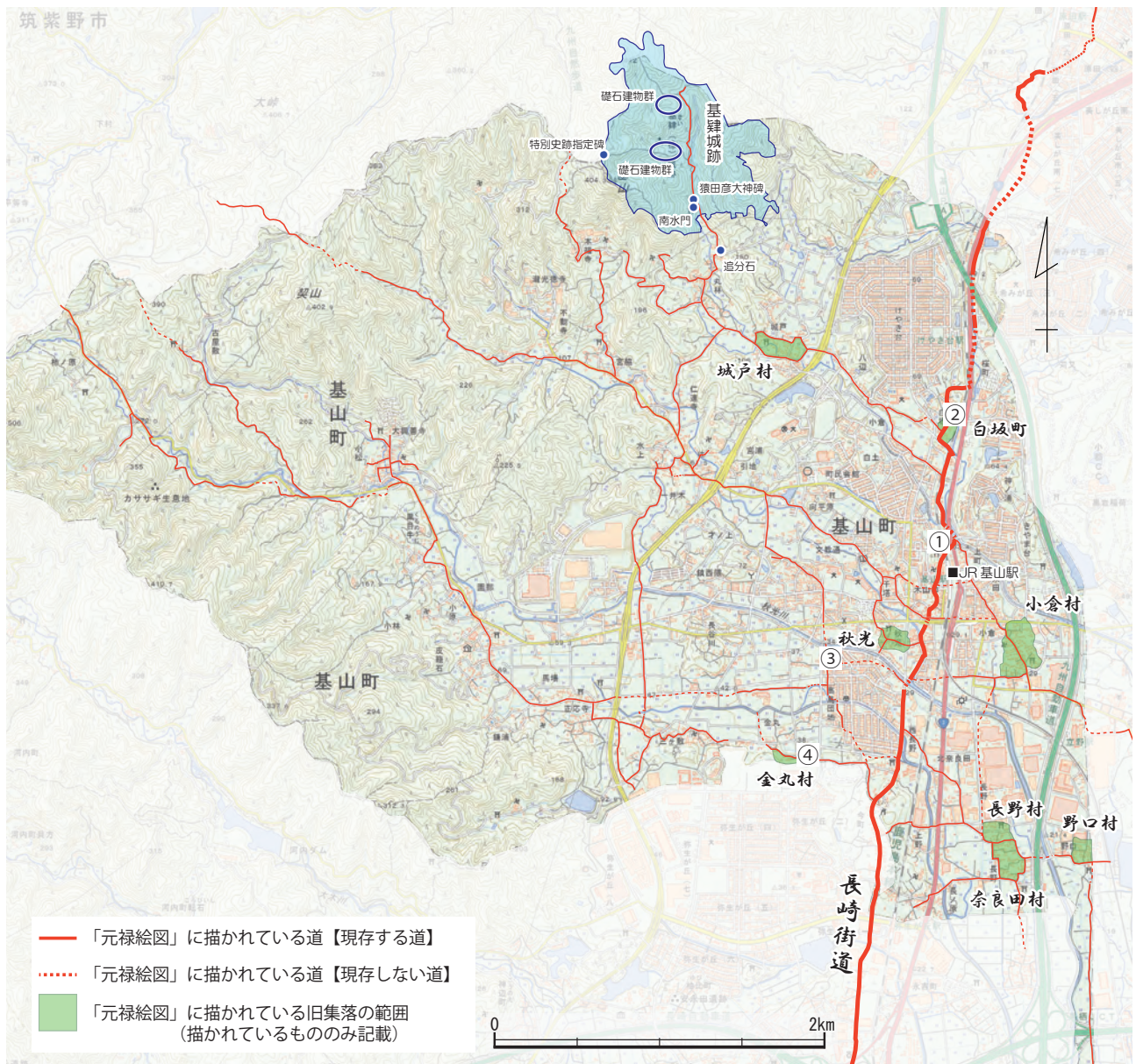


図 現代の地形に残る江戸時代の道



写真 長崎街道 (木山口町) ①



写真 長崎街道と荻又道 (白坂) ②



写真 東福寺観音堂横の道 ③



写真 金丸丘陵北側の道 ④

イ) 長崎街道と売薬

町内では、正保2年(1645)、長崎街道の筑前^{はるだ}原田宿と肥前^{たじろ}田代宿の間に位置する間宿として、木山口町が新しく成立し、栄えた。

本町東部には長崎街道が南北に通る、町域とその北側の筑前領との境には、その境界を示すため、文化4年(1807)に設置された「二国境石」(筑前国・肥前国)、その2年前の文化2年(1805)に肥前・筑前・筑後の三国を分かつ「三国境石」が設置され、現在も残されている。

この国境石にまつわる「枯れ松国境」の物語が、絵図面とともに町内に残されている。

また、この長崎街道という交通の至便な地の利と朝鮮貿易に長じる対馬藩田代領ということが要因となり、18世紀中頃までには田代売薬が発生する。後に対馬(対州)田代の売薬として、越中富山・近江(江州)・大和(和州)と並び、日本の四大売薬の一つにあげられるようになった。

長崎街道沿いに位置する白坂には、売薬に携わっていた古民家が今でも残っている。



図 長崎街道と町内の白坂、木山口

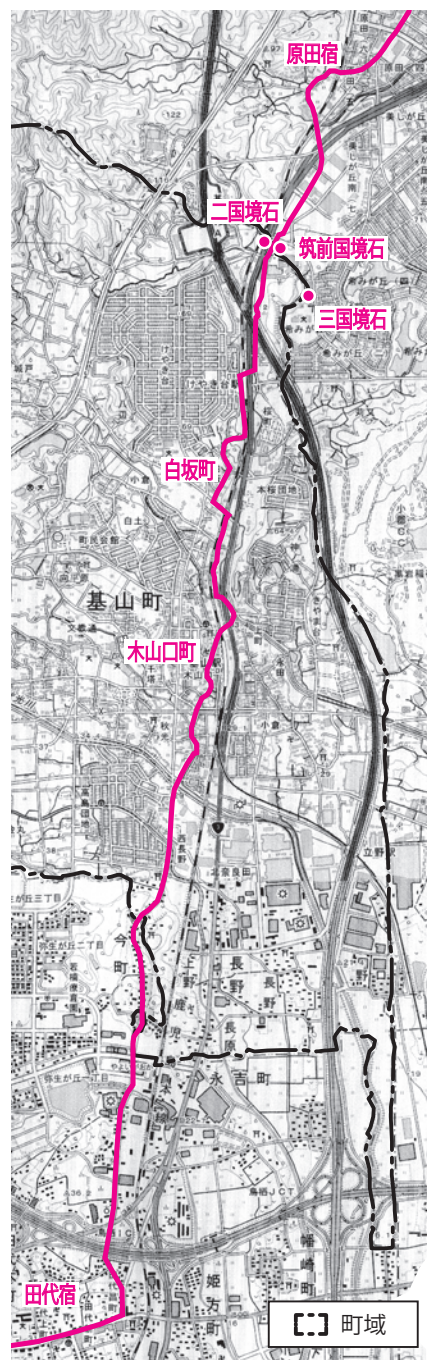


図 田代宿から原田宿までの長崎街道

5) 近代

ア) 基山村と基山町の成立

本町が属する田代領は明治4年(1871)の廃藩置県により^{いずはら}巖原県(現長崎県)に所属したが、その後いくつかの変遷を経て、明治16年(1883)に佐賀県に所属した。

本町は、明治22年(1889)には、小倉・長野・園部・宮浦の4ヶ村が合併して基山村が成立し、昭和14年(1939)に町制施行により基山町となり、その後、昭和34年(1959)長野の一部を鳥栖市に分離し、現在の町域となっている。

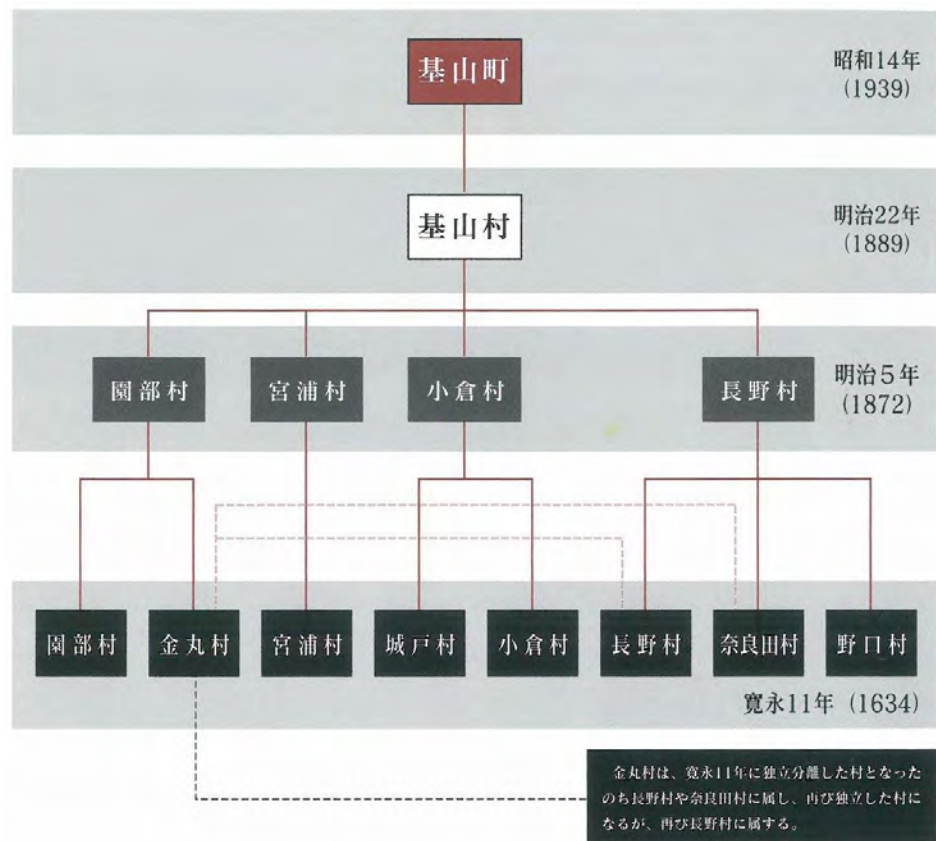


図 基山町の変遷

イ) 基山村の近代化

基山村における近代化は、明治時代から大正時代にかけて進んでいく。明治35年(1902)には木山口郵便局が開局され、明治44年(1911)には電気供給が開始される。大正10年(1921)8月10日には、九州鉄道信号所であった基山に基山駅が開業する。いずれも、^{やないいくたろう}梁井幾太郎氏、^{まつぐまらいぞう}松隈来造氏など近代の基山を築き育成した人々の尽力した結果である。

この頃の基山村の主な商工業は、売薬関係と酒造業であったが、地の利を活かした新たな企業の進出もあった。大正15年(1926)、長野県を本拠地とする株式会社金四製糸工場^{かねし}基山支店が設立された。工場は、基山駅そばの南東域一帯に約6000坪の規模で建設され、約300名の従業員が働いていた。筑豊からの石炭輸送や九州各地から来る女性労働者の交通の便などから、この場所が選ばれている。

昭和時代前期に入ると、軍国化の影響もあり、昭和11年(1936)には東京火薬工場基山分工場、昭和14年



資料 基山駅の開業(大正10年(1921))

(1939)には日本火薬工場基山分工場が進出している。また、大刀洗飛行場および周辺の工場への材料輸送を目的に、基山駅を起点として、甘木(現福岡県朝倉市)までのびる国鉄甘木線が開通した。

一方で、小作料の減給の要求により、地主と小作農民が争う小作争議が大正時代に起こっている。地主の土地所有数が多かったこともあり、本町域が含まれる三養基郡が、県内における小作争議の発生数が最も多かった。特に、大正10年(1924)10月に発生した小作争議は、基山村や周辺の町村でも行われ、規模と激しさの点で「日本三代小作争議」の一つとも言われている。



資料 金四製糸工場(昭和初期)

ウ) 九州帝国大学源氏螢養殖場

大正10年(1921)に、町域を流れる秋光川に、九州帝国大学医学部による源氏螢養殖場が設けられ、病原駆除虫としてや、発光細菌(自然発光体)の研究素材としてホタルが育てられていた。

初夏に飛び交うホタルは、観光資源としても活用されている。木山口商工会(現基山町商工会)の松隈来造氏が中心となり、ホタルを資源に観光客を呼び込む活動が行われ、博多など多くの地域から、通称「ホタル列車」と呼ばれる臨時列車も運行され、多くの人々で賑わった。



資料 絵はがきにみる秋光川の源氏螢養殖場(昭和初期)

6) 現代

ア) 戦後

戦後の農地改革により、昭和20年(1945)では、農地の約40%が小作地だったが、改革後は自作農が77%を占めるようになる。商工業では、戦前から続く工業製品として、配置売菜、清酒、菓子、麺類、農機具、機械部品、電気雷管などを製造していた。

イ) 高度経済成長期～平成

昭和46年(1971)には九州自動車道、昭和47年(1972)に旧鳥栖筑紫野有料道路が開通し、鳥栖ジャンクションも整備された。これにより、鉄道の鹿児島本線と甘木線、自動車道の国道3号も合わせ、本町は、交通の要衝として、物流の流通拠点として、九州でも大きな役割を果たすことになる。

産業においては、高度経済成長とともに、町内への企業進出が進んでいく。昭和39年(1964)には、王冠、缶、ブリキ印刷の工場が創業し、昭和40年代には、アスファルトプリント組み立てやターミナル倉庫などの企業が立地するようになった。基山工業団地や野口・立野工業団地をはじめ、町外企業の工場立地は、現在35社を越えている。

また、昭和40年代以降は、近隣都市のベッドタウンとしても発展していく。この背景には、博多駅まで快速で約25分といった交通の便の良さも影響している。大規模住宅団地として、高島団地、きやま台住宅団地、三井ニュータウン、本桜団地、サンシティけやき台などの開発が進んでいった。



写真 鳥栖ジャンクション

ウ) 現在

平成30年(2018)現在、本町の人口は、約17,500人であり、佐賀県内にある20市町のなかで、人口でみると14位に位置している。

本町の特徴の一つとしてスポーツ振興が挙げられる。子どもたちの野球、柔道、バレー等多様なスポーツが盛んに行われ、地域の優勝のみならず全国優勝を果たした経歴を持つクラブもあり、プロ野球選手を輩出している。また、文化面においても、平成24年度から始まった、本町の歴史や文化をテーマとした町民主体の創作劇も続けられ、昨今では町民自ら文化遺産を調査し、来訪者に対し解説する活動も見られる。

さらに、平成29年度には、明治維新150年を記念する「基山・対馬交流事業」に取組み、歴史的に深い縁のある対馬市を本町の小中学生が訪問し、現地の歴史遺産の見学や対馬市教育委員会の行事への参加等をとおして市民の人々との交流を行った。

このように本町では、平成28年(2016)からは「第5次基山町総合計画」において掲げられた3つの基本理念である、「心豊かな人と人の関係づくり」、「自然と共生したまちの魅力づくり」、「みんなが進める協働のまちづくり」の3つの基本理念のもと、様々な施策を推進している。



写真 平成29年度基山・対馬交流事業



写真 スポーツ振興（出典『第5次基山町総合計画』）



写真 新しい農業の魅力づくり（出典『第5次基山町総合計画』）



写真 コミュニティ活動の推進（出典『第5次基山町総合計画』）

(2) 基山町の歴史に関わりのある人物

1) 賀島兵介(1645~1697)

延宝3年(1675)に田代代官所副代官として来任し、貞享2年(1685)に田代領を去るまでの10年の間に、飢餓に頻した農民に救米を出したり、堤防や河川の普請等の善政を施し、領民から田代領更正の恩人と敬慕され、寛政6年(1794)に、その功德を追慕する領民代表の庄屋たちにより憲副賀島君碑が建立された。

現在でも、命日の4月9日に、賀島兵介公が治めた対馬藩田代領にあたる本町や鳥栖市、対馬市の行政関係者や田代地区の人々が集い、その遺徳を忍ぶ『賀島祭』が行われている。



資料 賀島兵介公の肖像画(永吉町永世神社蔵)



写真 毎年行われる賀島祭の様子

2) 寺崎紫白(出生年不明~1718)

基肄郡奈良田村の寺崎一波^{いっば}の妻で、久留米藩の出身。江戸時代元禄期に蕉風俳諧の先進地であった田代俳壇で活躍した。俳号は初め糸白で後に紫白に改める。俳壇登場は元禄10年(1697)刊行の晡扇^{ほせん}撰『染川集』で、元禄13年(1700)3月には、撰著の俳書として『菊の道』を京都の代表的な俳書書林である井筒屋庄兵衛から刊行した。この書は、我が国初の女性により編集された俳句集であり、地元俳人のほか芭蕉およびその直門の作を多く集めるなど、地方俳書とは呼び難い全国的に通用する内容であると言われている。



資料 寺崎紫白作『菊の道』
(京都大学文学研究科
図書館蔵)

3) 梁井幾太郎(1868~1944)

長野村年ノ森の酒造業の家に生まれる。田代小宮浦分校に入学の後、園部村皮籠石^{かわこいし}の野田昌隆(倭一郎)^{たいすいろう}の私塾対翠楼に学ぶ。明治24年(1891)に基山村で薬種商を開いたのを皮切りに久留米・熊本・博多等に支店を置いていった。この傍ら林業にも取組み、「基山の人達全部への謝恩の一端」にしたいと、後の基山産業組合の設立に尽くす。昭和8年(1933)、基山村長と産業組合長を兼任し、村の農林業や政治面でも貢献した。佐賀県農業協同組合基山支所には、頌徳碑がある。



写真 梁井幾太郎

4) 松隈来造(1887~1953)

宮浦村で享保年間から酒造業を営む松隈家に生まれる。大正3年(1914)に木山口商工会(現基山町商工会)を創設した。以来、会長として39年間にわたり基山駅設置、秋光川の観光源氏螢養殖、特設電話架設、国鉄甘木線の基山駅分岐などの運動を展開し、町商工業の発展に尽力した。また、村議、町議、町長として行政面でも貢献した。昭和37年(1962)に基山町商工会により来造氏の功績を称え、千塔山桜ヶ丘公園に顕彰碑を建立した(後に若宮八幡神社境内に移設)。



写真 松隈来造

5) 久保山善映くぼやまぜんえい(1877～1941)

園部村小林の専念寺に生まれる。明治28年(1895)に基山きんじょう尋常小学校の訓導となった。大正元年(1912)より大野城跡や水城跡に比べて知名度が低く研究が遅れていた基肆城跡について精力的に踏査・研究し、論文発表や講演等を通して同史跡の内容や価値等を発信し続けた。また、基山山頂に「天智天皇欽仰之碑」と雷雨等の際の避難所である「通天洞」や展望所の建設、基肆城跡の国指定に尽力した。昭和6年(1931)佐賀県史蹟名勝天然記念物調査委員に任命された。大正13年(1924)に専念寺住職となり、地元小作争議の調停役としても尽力し、昭和3年(1928)に佐賀県史跡功労者、小作調停功労者として表彰された。



写真 久保山善映

6) 神原玄祐かみはらげんゆう(1894～1995)

神埼郡仁比山村地藏院に生まれる。明治34年(1901)に同郡三田川村金乗院住職神原玄啓の養子となり、翌年得度し玄祐と改名した。大正9年(1920)に大興善寺住職を拝命し、以後荒寺の復興の一助として本堂の裏山一帯につつじを植え続け、総面積80ヘクタールに5万本のつつじ園を造った。昭和7年(1932)より天台宗の宗務に就き、宗務総長や大僧正に昇進し、昭和53年から2年間三千院門跡門主となった。



写真 神原玄祐

7) 野田昌隆のだまさたか(通称 野田倭一郎わいちろう)(1819～1887)

代々園部村上村の庄屋であった皮籠石の野田家に生まれる。通称倭一郎、号を基山とした。帆足萬里らに学んだ後に、弘化2年(1845)に村吏となった。幕末から明治初期にかけて自宅に私塾である対翠楼を開設し、近郷の子弟に文武を教えて千余人もの門人を育てたとされている。門下生からは「基山先生きざん」と敬愛され、皮籠石集落の入り口には「野田先生記念之碑」が建立された。



写真 野田先生記念之碑

8) 天本龍之介あまもとたつのすけ(1889～1965)

基山村小倉に生まれる。明治39年(1906)に売薬業を始め、西海製剤合資会社(現西海製薬)を創設した。村議を経て、昭和14年(1939)から昭和39年(1964)までの19年間、町長を務めた。戦後の混乱期、戦災孤児を収容していた同町宮浦の「洗心寮」への旧日本軍放出の塩・味噌・醤油・毛布の提供のほか、戦没者遺族の雇用斡旋など仁慈に満ちた行政運営は町民に好感を与えた。昭和44年(1969)天本氏を敬慕する町民有志により旧基山町立公民館西に胸像碑が建立された。



写真 天本龍之介

4. 文化財の分布状況

(1) 指定等文化財の分布状況

本町には、国指定、県指定、町指定を含めると、これまでに計7件の指定等文化財がある。

表 基山町の指定等文化財件数(資料：町資料)

種別			国	県	町	計
有形文化財	美術工芸品	彫刻	1	1		2
		考古資料		1	1	2
民俗文化財	有形民俗文化財				1	1
	記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財		1			
記念物	遺跡		1			1
計			3	2	2	7

(2) 国指定等文化財

国指定等文化財は3件である。

国指定の有形文化財（美術工芸品）1件、記念物（遺跡）1件のほか、本町と鳥栖市の旧対馬藩田代領一帯の「田代の売薬習俗」が、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財として選定されており、記録保存が図られている。

表 国指定等文化財一覧(資料：町資料)

種別			名称	所在	指定（選定）年月日
有形文化財	美術工芸品	彫刻	木造多聞天立像・木造広目天立像	大興善寺境内 (基山町大字園部3628)	昭和25年(1950) 8月29日
民俗文化財	記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財		田代の売薬習俗	基山町、鳥栖市の一部	平成7年(1995) 12月26日
特別史跡	遺跡		基肆(椽)城跡	基山町大字小倉字北帝・坊住・車道ほか	昭和29年(1954) 3月20日

ア) 木造多聞天立像・木造広目天立像

養老元年(717)創建の大興善寺の本尊十一面観音菩薩立像の守護とされている。頭部と体部は一木造り（一本の木から彫り出してつくる技法）、そこに両腕を取り付けている。また、いずれも兜・鎧をつけ、沓を履き、岩座の上に立っている。

多聞天立像は高さ約145cmで檜を使用し、広目天立像は高さ約149cmで梅檀の木を使用しており、いずれも平安時代後期頃につくられたといわれている。



写真 木造多聞天立像



写真 木造広目天立像

イ) 基肄(椽)城跡

基肄城は、『日本書紀』によれば天智4年(665)に大宰府を中心とするこの地一帯を防衛する目的で築かれた山城である。

当時、日本は天智2年(663)白村江において唐・新羅の連合軍に百済とともに戦って大敗し、その結果、朝鮮半島から退却した。それに伴い大陸からの侵攻に備え、天智3年(664)、対馬、壱岐、筑紫国に防人・烽を設置し、水城を築造するとともに、大宰府を防衛するために、白村江の敗戦ののちに日本に来た百済の遺臣「憶礼福留」「四比福夫」の2名の指揮のもとに、大野城(福岡県)・基肄城を築造した。

基肄城は、自然地形を利用し、基山山頂(404.5m)から谷を挟んで東峰(327m)までの広大な範囲を囲む約3.9kmの土塁・石塁を巡らせている。4ヶ所(推定含む)の城門と、南側の石塁には水門が設けられている。城内には武器や食料等の備蓄倉庫と思しき礎石建物跡がある。朝鮮半島の山城と同様の造りで築かれていることから、『朝鮮式山城』と呼ばれる。わが国最初の本格的な朝鮮式山城として、歴史的・学術的に極めて貴重な遺跡である。

昭和12年(1937)に国の史跡に指定され、昭和29年(1954)には国の特別史跡に指定された。



写真 基肄城跡空中写真

(3) 県指定文化財

県指定文化財は2件である。

表 県指定文化財一覧(資料:町資料)

種別			名称	所在	指定年月日
重要文化財	美術工芸品	考古資料	千塔山遺跡出土 青銅製鋤先	基山町立図書館 (基山町宮浦大字60-1)	昭和61年(1986) 3月19日
		彫刻	木造十一面 観音菩薩立像	大興善寺境内 (基山町大字園部3628)	平成18年(2006) 3月31日 指定

ア) 千塔山遺跡出土青銅製鋤先

千塔山遺跡は、JR基山駅前(モール商店街付近)の標高約50mの小高い丘陵地にあった、弥生時代終わり頃の環濠集落跡である。

発掘調査の結果、約40棟の竪穴住居跡が確認され、集落の周囲は断面が「V」字形や「U」字形の溝に囲まれていた。

青銅製鋤先は、溝や住居跡から計7点出土し、そのうち2点は完全な形のものである。鋤とは現在のスコップのようなもので、鋤先とはその先端に装着されるものにあたる。



写真 千塔山遺跡出土青銅製鋤先



写真 千塔山遺跡全景

イ) 木造十一面観音菩薩立像

大興善寺の本尊であり、12年のうち午年の一度だけ扉がひらかれる秘仏とされている。右手に錫杖、左手に水瓶を持ち、方形の岩座の上に立っている。像の高さは177cmで、檜とみられる針葉樹を使用して、寄木造り(※多くの木を寄せ集めてつくる技法)によってつくられている。鎌倉時代頃に作成されたものと考えられている。

(4) 町指定文化財

町指定文化財は4件である。

表 町指定文化財一覧(資料：町資料)

種別			名称	所在	指定年月日
重要文化財	美術工芸品	考古資料	自然石彫像板碑	大興善寺境内 (基山町大字園部 3628)	昭和60年(1985) 5月13日
重要有形民俗文化財			宝篋印塔		昭和48年(1973) 3月10日
重要無形民俗文化財			荒穂神社の 御神幸祭		令和3年(2021) 6月1日
			宝満神社の 園部くんち		

し ぜんせきちやうぞういた ひ

ア) 自然石 彫 像板碑

自然石彫像板碑は、高さ1 m30cm、幅54cmの板状の花崗岩に、高さ65cmの制吒迦童子と思われる像が彫り込んである。像の右下には「正平十年 八月十八日 檀那□(※解説不可) 敬白」という銘文がある。「正平十年」は西暦1355年にあたり、南北朝時代の南朝方の年号を示していることから、この一帯が当時南朝の勢力下にあったことがうかがえる。

この板碑は、本来大興善寺近くの農道脇に建てられており、当地域の治病・安産・災害の除去等を祈願するものとして祀られていたと思われる。

ほうきやういんとう

イ) 宝 篋 印塔

ごちやうりつし

享和2年(1802)に豪潮律師によって建立された塔である。発願主である豪潮律師は、寛延2年(1746)に肥後国玉名郡に生まれた名僧で、当時の社会不安を取り除き平和をもたらそうと、8万4千塔の建立を発願し、大興善寺に最初の塔を建立した。

この塔は、土台に巨石を据え、基礎、塔身、屋根、相輪によりつくられており、石材は全て花崗岩を使用している。



写真 自然石彫像板碑



写真 宝篋印塔

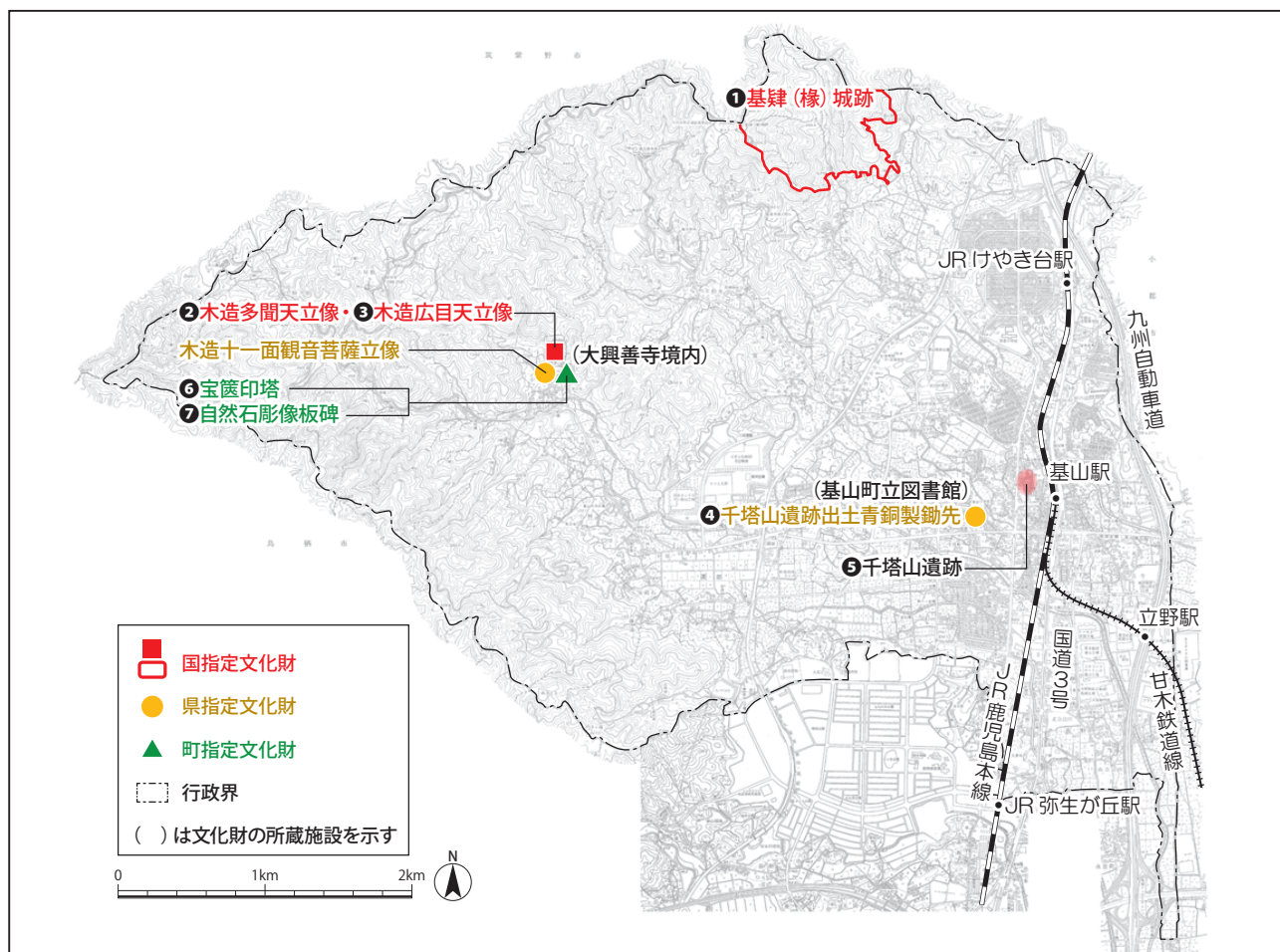


図 指定文化財分布



(5) 主な未指定文化財

指定・未指定に関わらず、町民が未来に伝えたい文化遺産を発見し、調査の成果を自らが一般に語るといった町民参加型の取り組みとして、平成28年度より「文化遺産ガイドボランティア講座」を開催している。同講座では、参加者自らが文化遺産を発見する取り組みを行うとともに、発見した文化遺産について語り継ぎたい文化遺産情報の収集を行っている。



写真 文化遺産情報の冊子(平成27・28年度版)



写真 文化遺産情報の資料

その中で、収集された文化遺産は、^{きざん}基山の中で見つけた草花、巨石などの自然物から、見晴らしのよい眺望点、気になる建造物、昔話、売薬の歴史など多岐にわたっている。これらの大多数は、専門家による評価をまだ受けていない未指定の文化財である。

収集された文化遺産情報は、冊子化し、広く町民に公開も行っている。

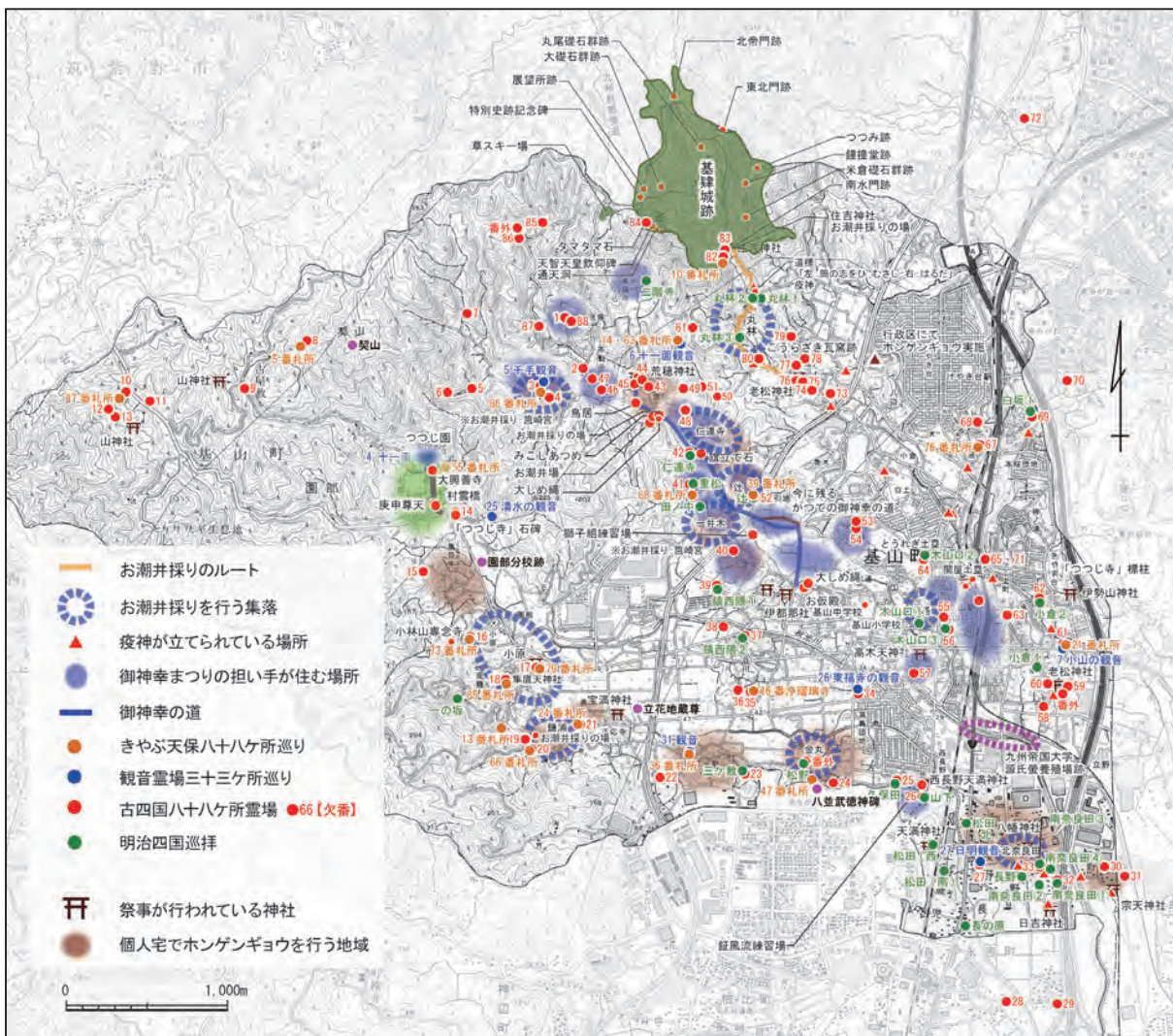


図 その他の文化遺産分布

(6) 主な特産品(農産物・醸造品・お菓子・郷土料理)

1) お茶

日本での茶の栽培は、鎌倉初期に栄西^{えいさいぜんじ}禪師が宋から持ち帰った種子を佐賀県脊振山に植えたのが始まりとされる。(『肥前史談第10巻第203号』昭和12年(1937)) 脊振山系に連なる本町の標高が高い地域は霧がかかり、お茶の生産に適した地となっている。



写真 茶畑で茶摘み体験をする小学生

2) 柿

柿は、つつじ寺で知られる大興善寺が位置する園部一帯で栽培されている。園部での生産は80年以上の歴史がある。環境に恵まれ、味と質を揃えた基山の柿としての銘柄が今日まで続いている。



写真 基山産の柿とアスパラガス

3) アスパラガス

本町は、高度な多収技術と高品質を誇る佐賀県産アスパラガスの産地の中でも有数の地として知られている。多くが簡易なパイプハウスの中で栽培され、2月から3月にかけて春芽を収穫する際、一部を残しておいてその後に出てくる夏芽を10月まで収穫する方法がとられ、早春から晩秋まで長期にわたって収穫できるようにしている。



写真 基山産の日本酒

4) 日本酒

酒造業については、享保年間創業と伝えられる松隈酒造場と、大正8年(1919)創業の基山商店酒造場が知られており、佐賀脊振山系を主峰とする九千部山や基山^{きざん}から湧き出る伏流水と地元の酒米を原料として日本酒がつくられている。基山商店の銘柄は「基峰鶴」で、平成26年度全国新酒鑑評会の入選に続き、平成27年度にはIWC(インターナショナル ワイン チャレンジ)大吟醸・吟醸の部でGOLDメダルを受賞している。毎年新春には、新酒の出来栄えを見定める新酒会が開催され、町内外から多くの人々が訪れる。

5) 味噌

基山町産の米、三養基郡産の大豆、国産の麦等を使用し、無添加にこだわった昔ながらの手作り味噌である。その工場は大興善寺のある契山の麓に位置している。



写真 手作り味噌

6) 薬

配置売薬で有名となり、国の記録作成等の措置を講ずべき無形文化財である「田代売薬習俗」の製薬業は、明治初期まで手工業による生産であったが、明治末期になると工場生産されるようになる。販売を営む会社の設立が相次ぎ、製造過程だけでなく販売形態にも変化がもたらされた。明治38年(1905)には、田代村や基山村の売薬業者が発起人となり「田代製剤合資会社」が設立され、現在この系統を引き継ぐ製薬企業が営業を続けている。



写真 配置売薬

7) イゲン葉饅頭

イゲン葉饅頭は、イゲ(さるとりいばら)の葉で包んだ、餡子が入った上新粉の餅である。本町では、祭りや行事の時に各家庭で作って食べられてきた。田植時には「田植饅頭」、よどの祭りでは「よど饅頭」に名前を代える。現在、町内の菓子店では、塩漬けした葉があり一年中食べられるが、昔は黒岩さん(稻荷神社)や古屋敷の山に入り、イゲン葉を採ってきて作ることが初夏の風物詩であった。



写真 イゲン葉饅頭

8) やぶれ饅頭

昭和5年(1930)創業の長崎屋の代表的なお菓子で、皮が薄くて中の餡が見えるこぶりの饅頭である。明治生まれの初代が京都で菓子職人修行をし基山に帰り開店した。当時は大きな饅頭が好まれていた時代で、京都仕様のやぶれ饅頭は上品なお菓子として最初は敬遠されたが、次第に受け入れられて広まった。お土産や、お茶菓子に利用されている。

初代の親は長崎で鮮魚店を開いていたが、身体を壊して初代を京都から呼び戻し、「故郷の基山に帰りたか」と基山に帰郷。長崎から帰ったので周りの人々が「長崎屋」と呼び出し、そのまま店名になった。



写真 やぶれ饅頭

9) だんだら粥

小正月の1月15日に食べる粥である。正月に床の間に置いていた「手かけ」の米でご飯を炊き、炊きあがる少し前に、塩をまぶした餅を釜に入れる。塩気の付いた餅が柔らかくなりだらりとなる様子からこの名称が付いたと考えられている。

※「手かけ」とは正月に三方に米を盛り、小さく切ったすめめや昆布、干し柿、みかんなどを載せて飾るもの。



写真 だんだら粥

10) 鶏肉のレモン煮

鶏肉のレモン煮は、本町で生まれ育った人なら誰もが知っている給食の人気メニューである。醤油、酒で味付けした鶏を唐揚げして、醤油、みりん、砂糖、レモン汁、パセリのタレに絡めたもの。基山町立小中学校の栄養士が考案し昭和48年(1973)から給食のメニューとなり、鳥栖、上峰、佐賀方面にも広がっている。現在は、その味を懐かしく思う人が多い為、町内の居酒屋のメニューになり町民に愛されている。



写真 手かけ



写真 鶏肉のレモン煮